

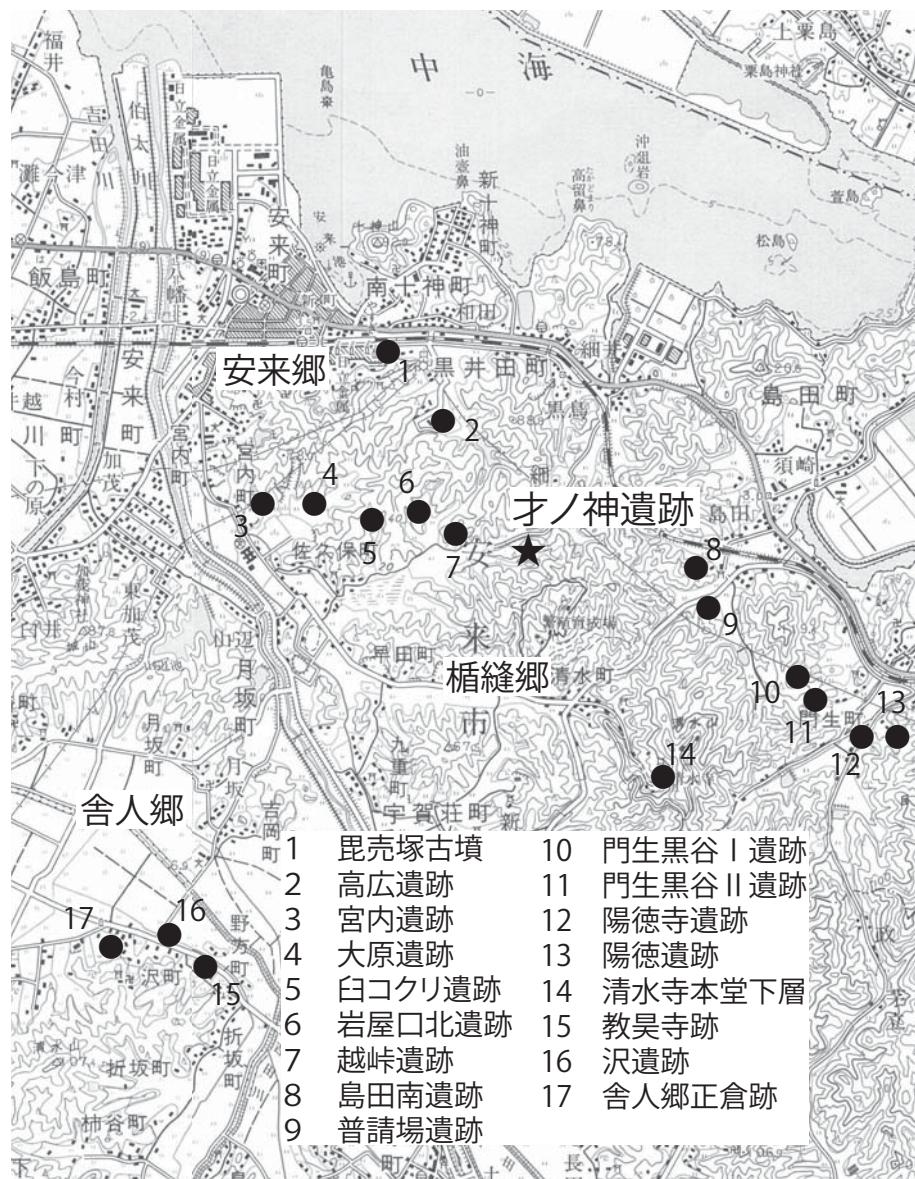
才ノ神遺跡の再検討

林 健 亮

1. はじめに

安来市黒井田町の才ノ神遺跡⁽¹⁾は、現在の山陰自動車道建設に伴って平成4年に発掘調査された。この遺跡からは、灯火痕跡の明瞭な須恵器皿Eや僧侶の持物とされる須恵器鉢A⁽²⁾などが出土している上、山陰地方で唯一（当時）とされた円形瓦塔と考えられる土製品が出土している。しかし、当時は高速道路建設を始めとする開発が急増し、発掘調査が追い立てられていた時期にあたり、現地調査は優先されるものの、残念ながら遺物整理や調査結果の検討には、十分な時間を割くことができていなかった例も多い。才ノ神遺跡についても、遺構の解釈や遺物の整理について、十分な検討がされていない点もあったことから、報告書の内容を中心に再検討を行うこととした。

本報告に使用した挿図は、基本的には報告書に掲載されている図面を再トレースし、方向の修正や合成を行ったものだが、出土遺物の一部については再実測したほか、報告書に掲載されなかった遺物についても実見し、新たに12点を実測した。また、調査時の現地写真も、報告書に掲載されていない写真を含め、必用な画像を再掲した。報告書では遺構名を区毎にそれぞれ1から連番で付けたことから、2つの調査区にまたがって同名の遺構名が存在していた。混乱を避けるため、本報告では各遺構名に区名を加えて呼んだ他、報告書で記号による遺構名のなかった遺構にも新たに遺構名を振った。遺物については番号を振り直しており、報告書に掲載された挿図番号との関係は、文末の一覧表に示している。なお、才ノ神遺跡では弥生～古墳時代



第1図 才ノ神遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1:50,000)

の遺物も出土しているが、本稿では古代の遺構・遺物に限って検討を行う。

2. 才ノ神遺跡の位置と周辺の遺跡

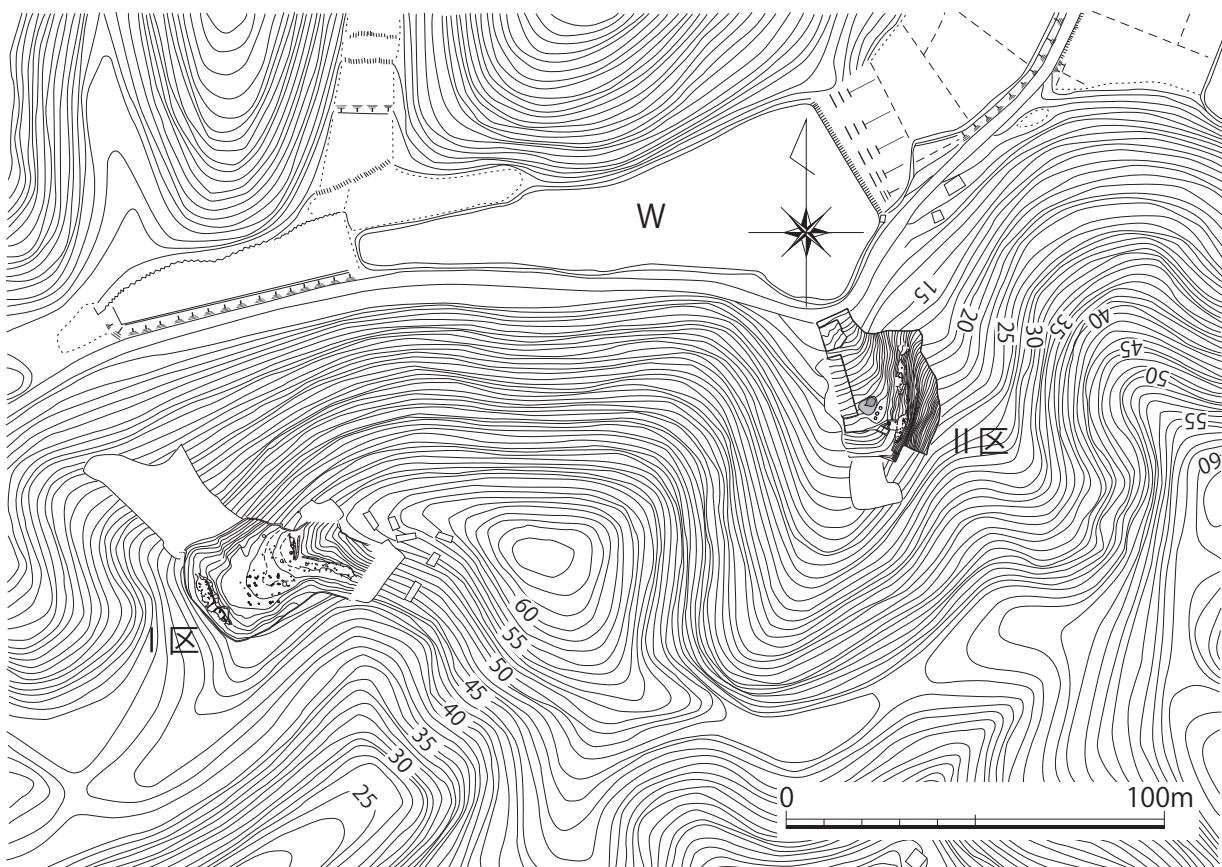
才ノ神遺跡は、安来市黒井田町の東西に延びる尾根上に立地し、尾根の標高は約70m。現在の山陰道建設に伴って1993年に島根県教育委員会が発掘調査を行った。

遺跡は、現在の安来市街地南東側の丘陵に位置する。同じ丘陵の西側には臼コクリ遺跡、宮内遺跡、岩屋口北遺跡など多くの横穴墓が知られ、住宅団地建設に伴って調査された高広遺跡も含め、近隣は県内でも有数の横穴墓密集地域となっている。これらの横穴墓は、臼コクリ遺跡で石棺、高広遺跡からは金銅装双龍環頭大刀、宮内遺跡からは馬具など、優秀な遺物を出土することで知られている。

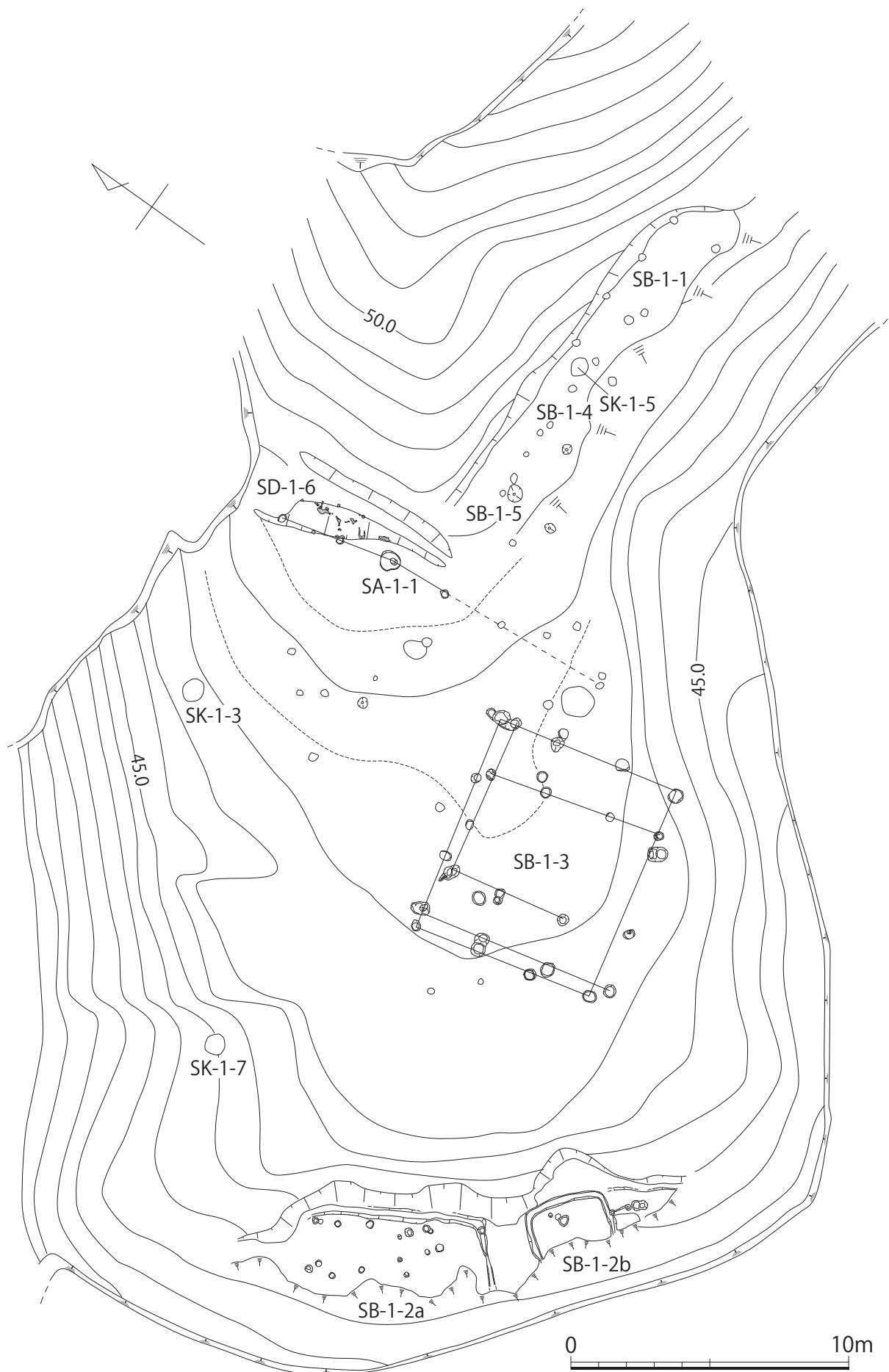
遺跡より南側の平野部を中心とする地域は、『出雲国風土記』では意宇郡舍人郷だったと考えられるが、これらの優秀な副葬品を持つ横穴墓がこの近辺に集中しており、郷名は、舍人として上番し帰郷した人物が存在した痕跡とする説がある（古代文化センター2014）。舍人郷の中心地に近いと考えられる安来市沢町から野方町には、炭化米が出土した舍人郷正倉跡や、『出雲国風土記』記載の教昊寺が近隣に存在すると推定される教昊寺跡、墨書き土器「寺」を出土（古代文化センター2003）した沢遺跡などが知られている。

前出の高広遺跡の他、吉佐町のカンボウ遺跡・石田遺跡・山の神遺跡・徳見津遺跡では奈良～平安時代の集落が調査されている。門生町の陽徳寺遺跡では教昊寺跡 II b型式軒丸瓦が出土するなど、奈良時代の山林寺院が存在した可能性があるほか、その背後の陽徳遺跡でも平安時代に尾根上で火を焚いた祭祀が行われた可能性が報告されている（林2022）。平安時代の遺跡としては、門生黒谷 I 遺跡の須恵器窯跡が知られているほか、門生黒谷 II 遺跡で土坑墓が調査され、篠窯産と推定される緑釉陶器碗が出土している。

天平五年の年記を帶びる『出雲国風土記』によれば、当時の遺跡周辺は意宇郡安来郷だったと思われる。『出雲国風土記』意宇郡安来郷には語臣猪麻呂が娘の復讐のため和爾を殺した話が記されているが、その伝承地とも



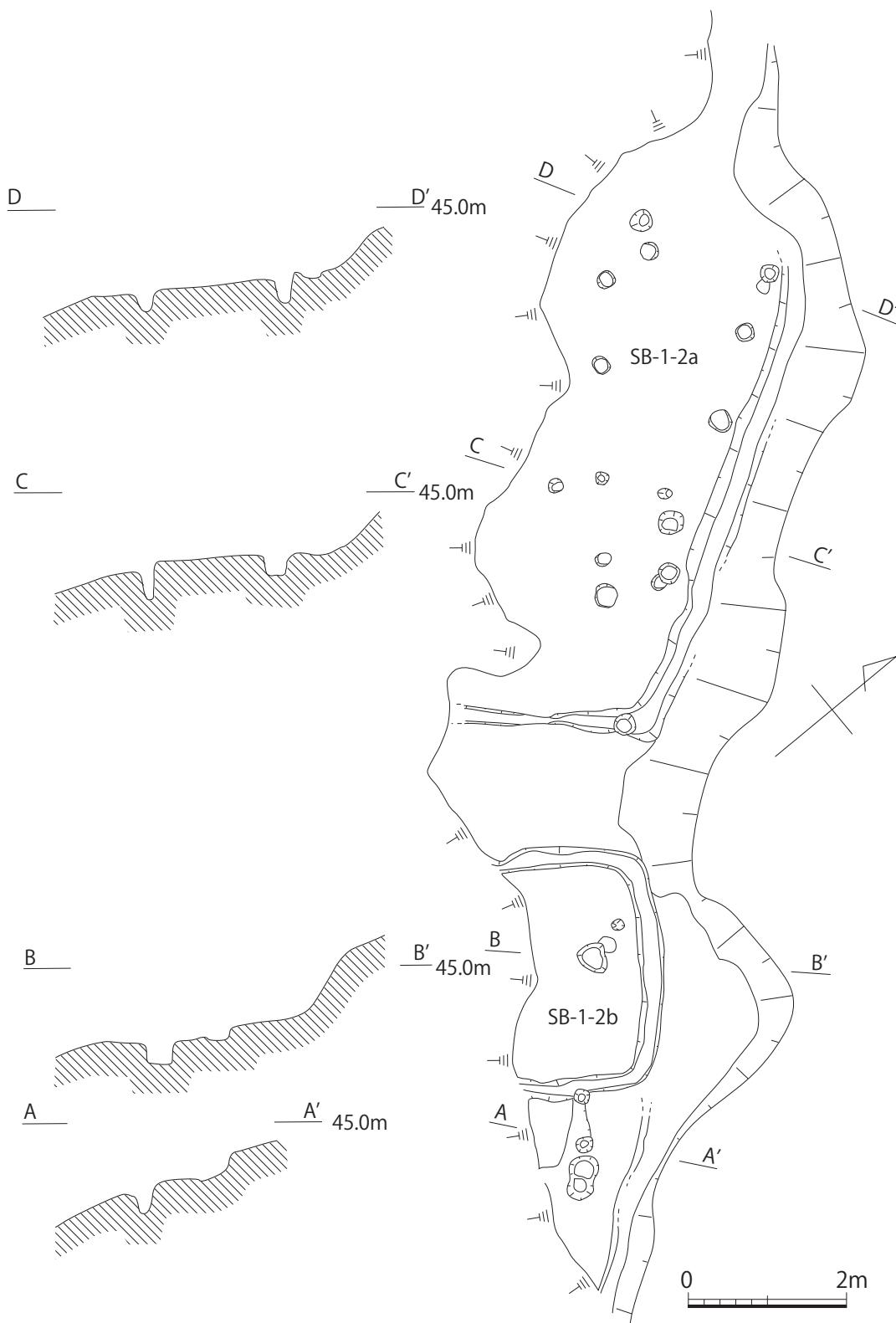
第2図 才ノ神遺跡地形測量図・調査区配置図 (S=1:2,000)



第3図 才ノ神遺跡I区遺構配置図 (S=1:200)

なっている毘売塚古墳は、遺跡の北西約1kmの丘陵上に位置する。ただし毘売塚古墳は中期古墳。

遺跡が位置する尾根は、現在は町境となっているが、古代においてもこの尾根を挟み、南側は楯縫郷だったとみられる。遺跡の南に位置する清水町には、天台宗の古刹清水寺がある。清水寺では、本堂の修理に伴って発掘調査が行われ、下層からは平安初期に遡る須恵器・土師器が出土している（清水寺委員会1992・林2021）。



第4図 SB-1-2a・b実測図 (S=1:80)

3. 才ノ神遺跡の発掘調査

(1) 才ノ神遺跡 I 区の遺構

才ノ神遺跡（第2図）は、丘陵の西側先端近く（I区）と、約150m離れた北向きの谷（II区）からなる。その間の尾根上には数カ所でトレンチが入れられているが、遺跡の広がりは確認されていない。I区は、西に向かって延びる尾根の先端近く、標高約45～50mを測る尾根上に位置する（第3図）。

調査区東側の加工段にSB-1-1・4・5と呼ぶ古墳時代の加工段・建物跡がある。SB1-1・4・5は東西に連続した一連の加工段。出土遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期のものが多く、その間に機能したと思われるが、加工段西端のSB-1-5から土師器壺の底部の小片1点が出土している。出土位置は遺構の西よりでSD-1-6隣接地。

古代の遺構は、加工段と溝のほか、2面庇を持つ可能性のある掘立柱建物がある。

北東－南西方向に延びる尾根筋の南西側先端に、東西約17m、最大幅3.4mの細長い加工段があり、溝で区画された建物跡とされるSB-1-2a・bを検出している（第4図）。加工段西側のSB-1-2aは、幅約6.5mほどの範囲をL字形の溝で囲み、16～17基の柱穴状の落ち込みが見られるが、建物となるような柱穴の並びはわからない。その東側に1.8m離れて、コ字形の溝に囲まれた東西約2.8m、幅約1.6mの区画、SB-1-2bがある。同様に建物は判らない。報告書では、SB-1-2a・bで覆屋を共有した可能性があると記されるが、不明。SB-1-2a・bからの出土遺物は少なく、報告では9～10世紀とされるが、わからない。

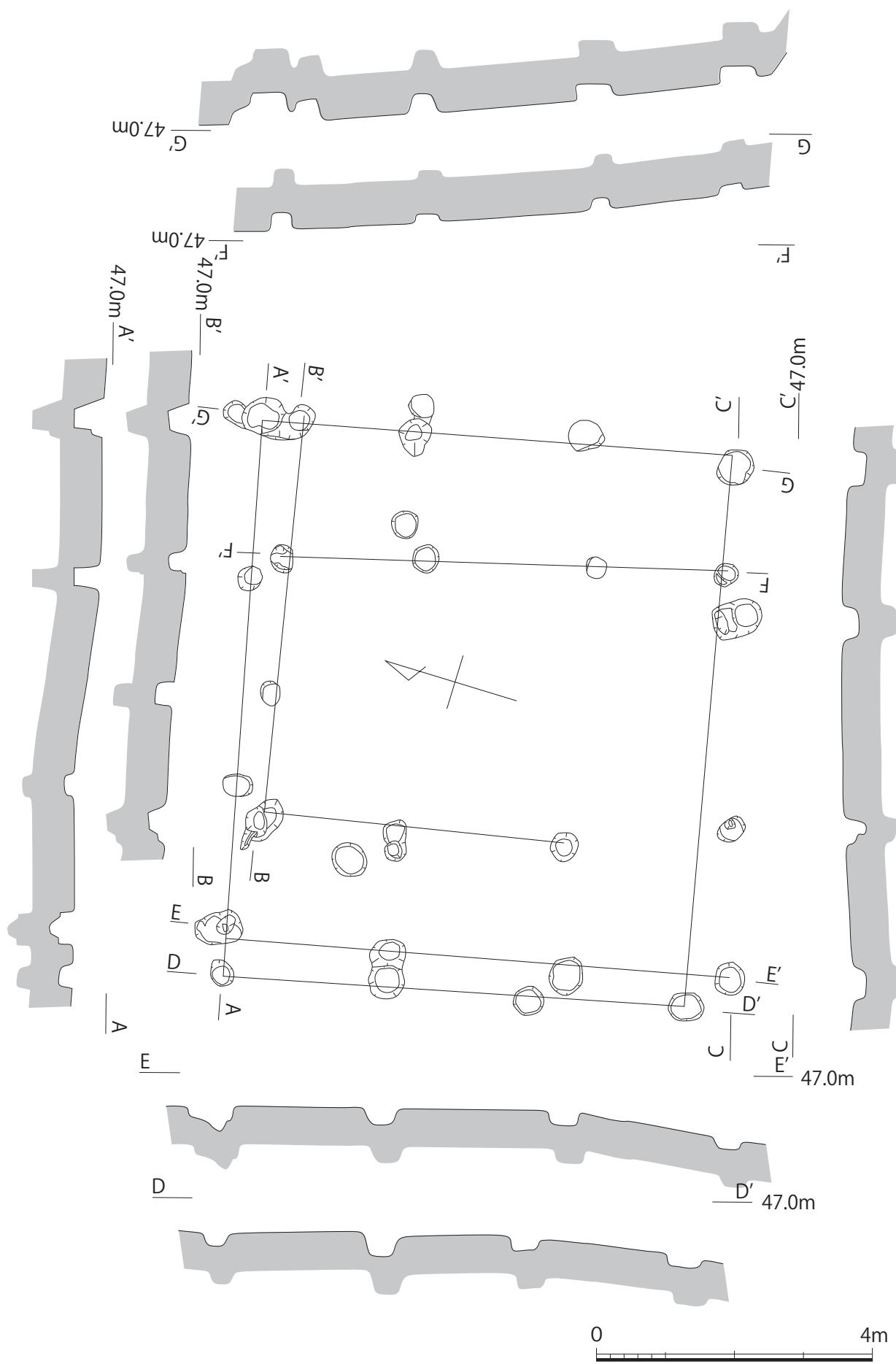
掘立柱建物SB-1-3（第5図）は、尾根上の平坦部に見られる柱穴群で、2面庇の掘立柱建物だった可能性が高い。比較的広い平坦面に建てられており、この遺跡の中心的な建物だった可能性がある。約10m四方の範囲に30基以上の柱穴があり、2面庇の建物跡に見える。身舎は南北3間で柱間は約2.3m、梁行は、約3.2～4.0m。東西に約1.6～2.2mの庇が付く。柱穴は、2基が並んでいるように見える部分が多いことから、建て替えがあったか。尾根上の掘立柱建物跡のため、確実に伴う遺物は確認できない。

SD-1-6（第6図）は、SB-1-3背後の尾根筋を切断するように検出されたごく浅い溝である。長さ6.8mで、幅は0.4～1.2m。深さは10～25cmと報告されている。報告書では、SD-1-6の内部には「焼土ブロックや炭粒が溜まり、壁面にも焼土ブロックがこびりつく感じで残っていた」と記され、高温で火を焚いた施設と想定されている。ただし、SD-1-6に壁や天井があった痕跡はなく、窯跡のような構造は確認できていない。酸化した鉄分を含んだ土が露出していた可能性もあるが不明。

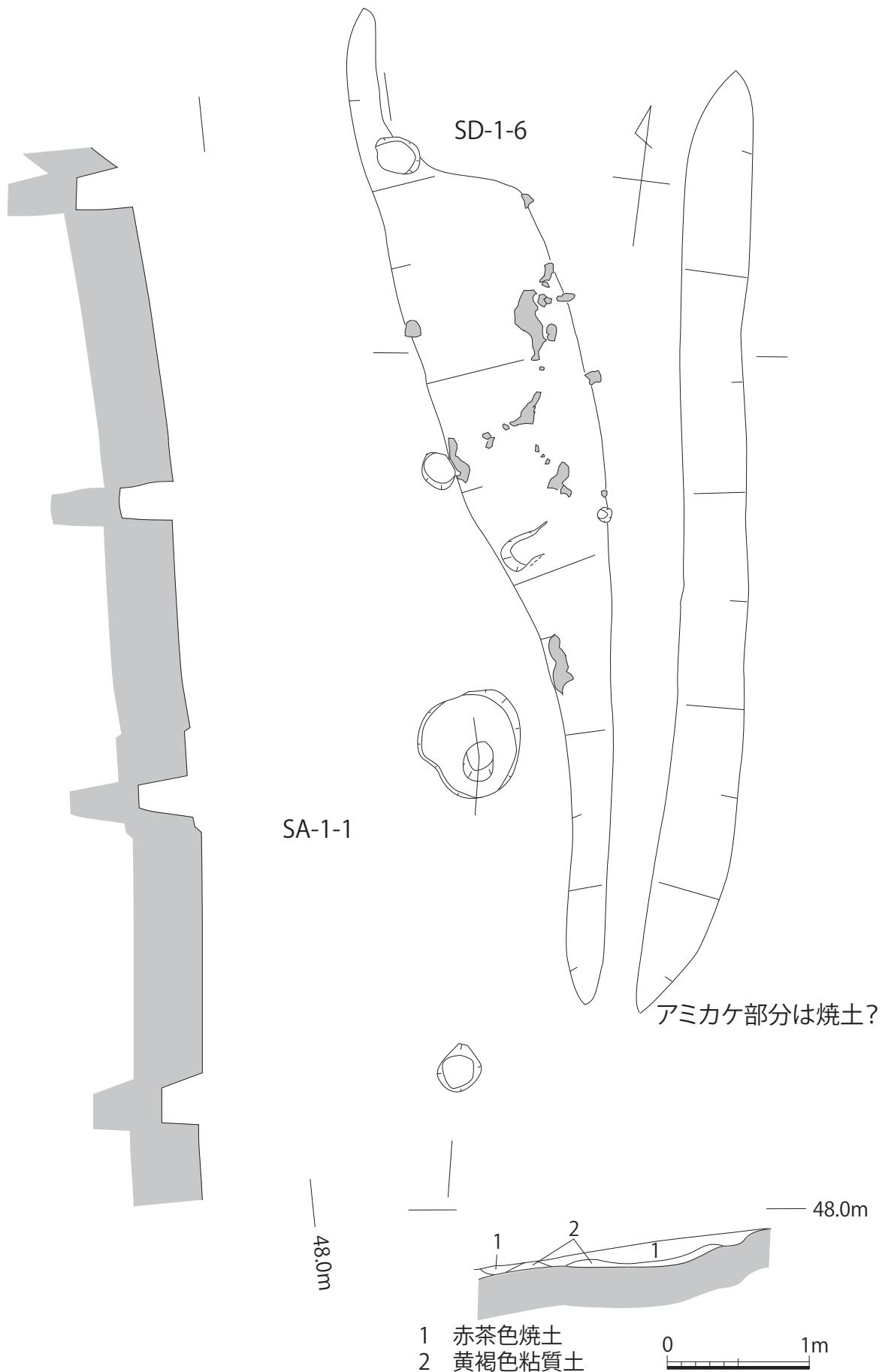
SD-1-6の西側には、溝に平行して4基の柱穴が発見されており、柵列（SA-1-1）が存在した可能性が想定されている。しかし、報告ではSD-1-6が火を焚いた遺構と想定しているため、同時併存しないと記される。SA-1-1は、報告では北側の4基の柱穴について柵を想定しているが、南端の1穴だけはやや小さく、一直線上には並ばない。一方、さらに南に同様の小さな柱穴2基が、直線的に並んでいるように見える。6基とすると約13m続くが不明。周辺では、他にも多くの土坑や柱穴状の落ち込みが見られるが、それらの時期・性格は不明。

SA-1-1の柱穴からは土師器（7-8）が、SD-1-6からは7-9・10と7-11の破片が出土している。報告では緑釉陶器皿（7-12）が、SD-1-6の近くから出土したと報告されるが、その出土位置は、SD-1-6の「中央から西へ2m程度離れた地点」で、「須恵器（7-11）の破片と共に出土」していると言う。この位置は、SD-1-6の外側で、SA-1-1よりもさらに西側となることから、むしろSB-1-3に近い位置。一方、須恵器皿（7-11）は接合する破片がSD-1-6近くからも出土しており、SD-1-6やSA-1-1、緑釉陶器（7-12）とも供伴するとは言いがたい。SB-1-3に関わるものか。

報告では、I区の各所から被熱した土坑が検出されていると言う。SK-1-3は調査区北側の標高46m付近から、SK-1-5はSB-1-1を埋めた土層から、SK-1-7はSB-1-3の置かれた造成面の先端下方から検出されている。いずれも深さ10cmほどとされ、炭粒が入っていたとされるが、これらの遺構の時期は判らない。



第5図 SB-1-3実測図 ($S=1:80$)

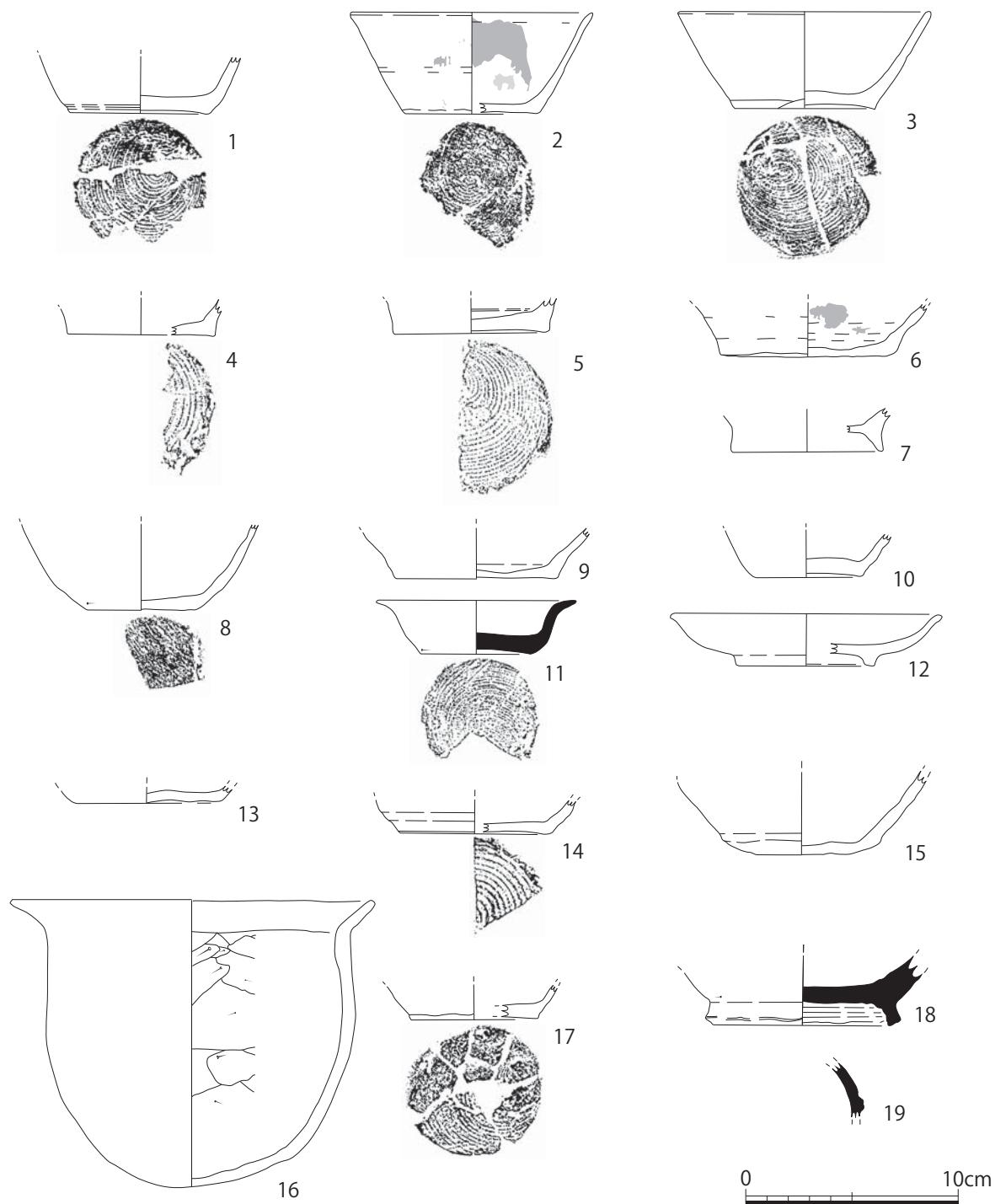


第6図 SD-1-6・SA-1-1北側実測図 (S=1:40)

(2) 才ノ神遺跡 I 区出土遺物

SB-1-5からは、平安期とみられる土師器坏底部の小片が出土しているが、SB-1-5は、古墳時代以前の遺構。小片1点のみの出土であることから、流れ込みか。

SB-1-2a・bからは土師器坏類と須恵器が出土している(7-1~9)。7-1~6は無高台の土師器坏で、底部の切り離しはいずれも回転糸切りか。この内、7-2土師器坏は口縁部の内外面にタール状の付着物、口縁部外面にスス状の痕跡があり、灯火器として使用されたと考えられる。7-7は断面三角形の高い高台を持つ坏。出雲国府跡では第6形式に含まれると思われ、9世紀後半代とされる。7-8はSA-1-1のピットから出土した土師器。7-6は土層



第7図 才ノ神遺跡 I 区出土遺物実測図 (S=1:3)

観察用の畦から出土した土師器坏。内面にタール状の付着物があり、灯火器に使用されたと思われる。ところで、この遺構の出土遺物については、いずれも山側の溝近くから出土したと報告されており、SB-1-2a・bではなく、上方の平坦面やSB-1-3に伴う可能性があるとされる。報告に従えば、SB-1-2a・bに確実に伴う遺物は存在しないことになり、SB-1-2a・bは時期不明の遺構とせざるを得ない。

SD-1-6周辺で出土した7-11須恵器は、口縁部を強く折り曲げる小型の皿。報告書では胎土の蛍光X線分析により篠窯領域に含まれるとされ、10世紀中頃に近い時期と推定されている。しかし、この土器は須恵器皿Eで、8世紀後半の在地産。

7-12は篠窯産綠釉陶器皿Dとされ、10世紀中頃とみられる。

非掲載遺物にも須恵器類の破片が含まれており、壺類とみられる破片が目立った。報告では、SB-1-2a・bで須恵器双耳壺の破片が出土したと記されているが、確認できなかった。7-19は、I区包含層出土と思われる資料で、突帯を廻らす壺胴部の小片。出雲国府跡では第6形式に含まれ、9世紀後半代のものか。7-13～15は土師器の坏。I区の西側斜面から出土している。いずれも底部の細片で平安期のものか。

7-16～18は、I区南斜面から出土した土器。7-16は小型の土師器甕で、外面にススが付着する。才ノ神遺跡で煮炊具の出土は少ない。7-17は土師器坏底部。回転糸切り痕を残している。7-18は須恵器長頸瓶の底部。8世紀中頃のものか。

I区出土包含層出土資料でも古墳時代以前の資料を除くと、須恵器長頸瓶（7-18）の8世紀中頃と見られる年代が最も古く、多くは9～10世紀頃の土師器坏類。灯火器の他、須恵器壺類が目につく。7-19は水瓶か。

（3）才ノ神遺跡I区の状況

I区では2面庇の掘立柱建物SB-1-3があり、その周囲では加工段SB-1-2a・b、溝SD-1-6、柵列と考えられる柱穴列が検出されているが、いずれも確実に伴う遺物がない。尾根の中心に位置しているのはSB-1-3であり、SB-1-3を中心とした施設群だったと考えられることから、多くの遺物がSB-1-3に伴う可能性がある。SB-1-3には、建て替えが行われた可能性があり、長期にわたって機能した建物だったのだろう。周辺の出土遺物から8世紀後半～9世紀後葉を中心とした時期と思われるが、篠窯産綠釉陶器（7-12）があることから建て替えを経て10世紀中葉まで続いている可能性もある。付近から須恵器皿Eが出土しており、屋内で灯火を使用した可能性が高い。9世紀代に使用されたと見られる土師器坏（7-2・6）にもタール痕のある個体があることから、1度の使用ではなく、度々灯火を使用していたか。

（4）才ノ神遺跡II区の遺構

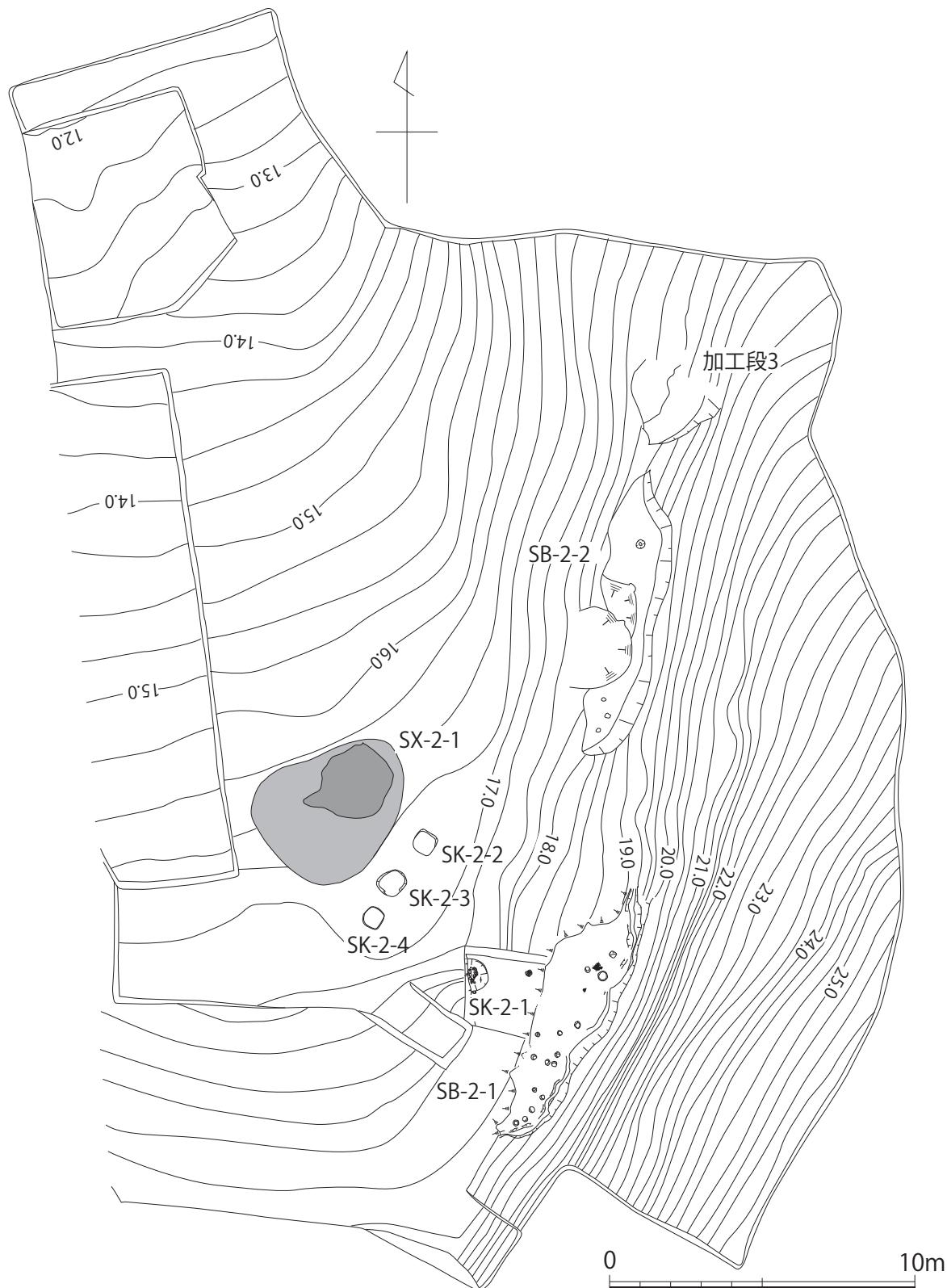
才ノ神遺跡II区は、北面した谷の内側で、越峰池に近い窪地。付近の標高は約20m。瓦塔片が入り込んだ土坑（SK-2-1）や溝・加工段が見られるが、大きな建物は確認できない（第8図）。

II区では土坑や炭溜も検出されている。調査区北側の標高18m付近で2面の加工段を検出し、SB-2-2、加工段2-3としている。SB-2-2は長さ約9m、幅1.5mほどの加工段で柱穴状の落ち込み4基を検出しているが、建物は判らない。時期を示す遺物は出土していないが、報告では、下方の包含層から出土した土師器甕を根拠に、古墳時代中期だった可能性を記す。SB-2-2の北側にある加工段3は、そのほとんどが崩落しており、全形は不明。報告書では、加工段3下方の包含層出土須恵器から8世紀末～9世紀前葉と推定するが、この須恵器が特定できない。いずれも直接伴う遺物はなく、時期は判らない。

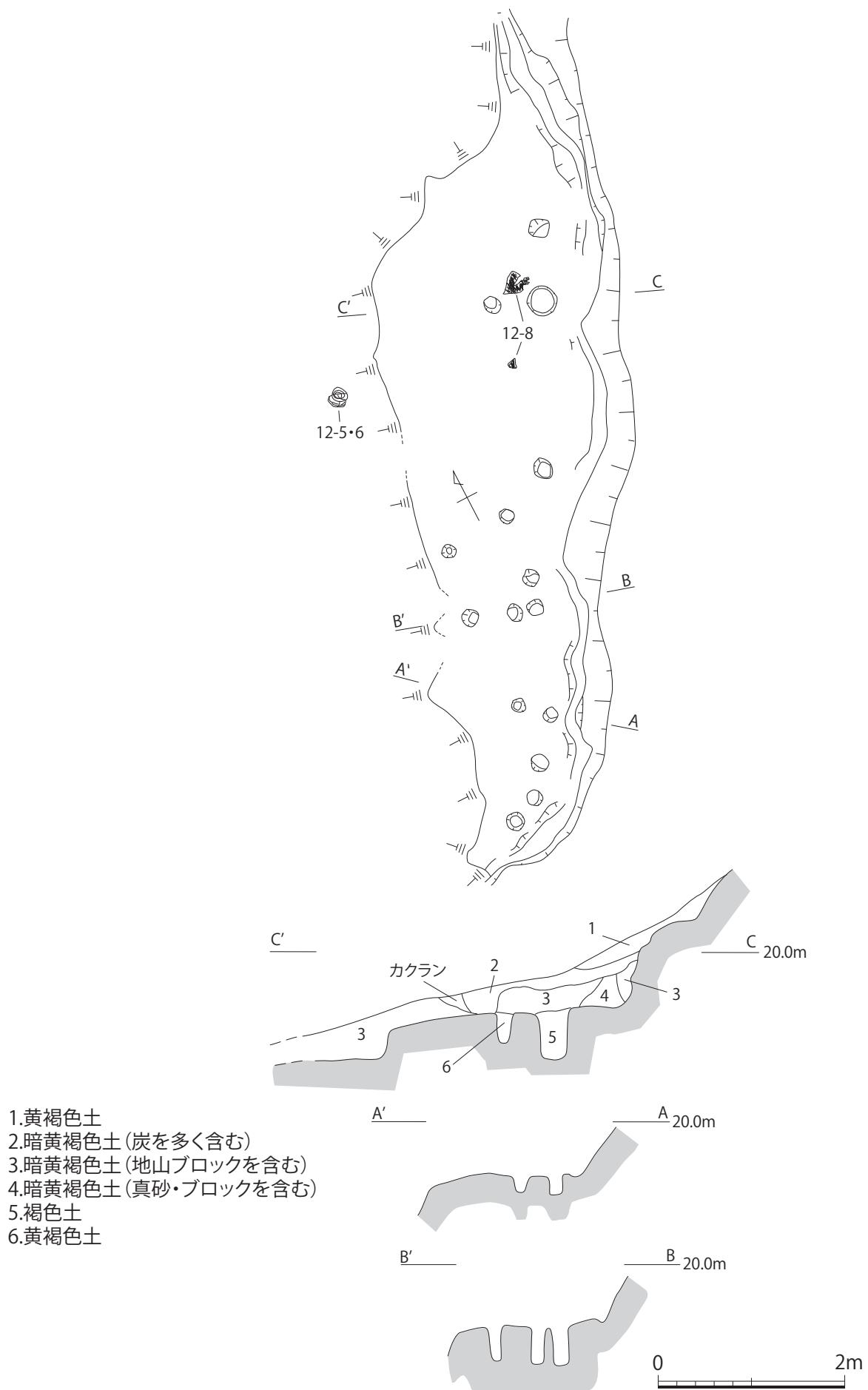
調査区南端の標高19m付近からは加工段SB-2-1が検出されている（第9図）。長さ約9mで、最も広い部分の幅約2.8m。不整形の平坦面を造成しており、いくつかの柱穴が見られる。SB-2-1からは須恵器皿（12-7）、須恵器甕片（12-8）の他、6点の須恵器皿Eが出土している。この内12-5・6は、SB-2-1西端のやや外側で、伏せて重なった状態で出土したと言う。出土した土は、覆土第3層と記され、地山ブロックを含んだ暗黄褐色土と見られる。土層断面図（第9図上）では、西側に落ち込みがあるように図示されるが、第8図遺構配置図では、SK-2-1

付近の掘り残し部分にかかる可能性があり、西側の線が地山面を表していない可能性がある。よって、土器の出土地点は、加工段前面の造成土上面だった可能性を考えておきたい。

SB-2-1の前面、標高19m付近で土坑（SK-2-1）を検出している（第11図）。報告ではボウル状と表現される半球形の土坑で、13-1円形瓦塔の破片が出土している。報告では「瓦塔埋納土坑」と記される。この遺構の詳細については次節に記す。



第8図 才ノ神遺跡II区遺構配置図 (S=1:200)



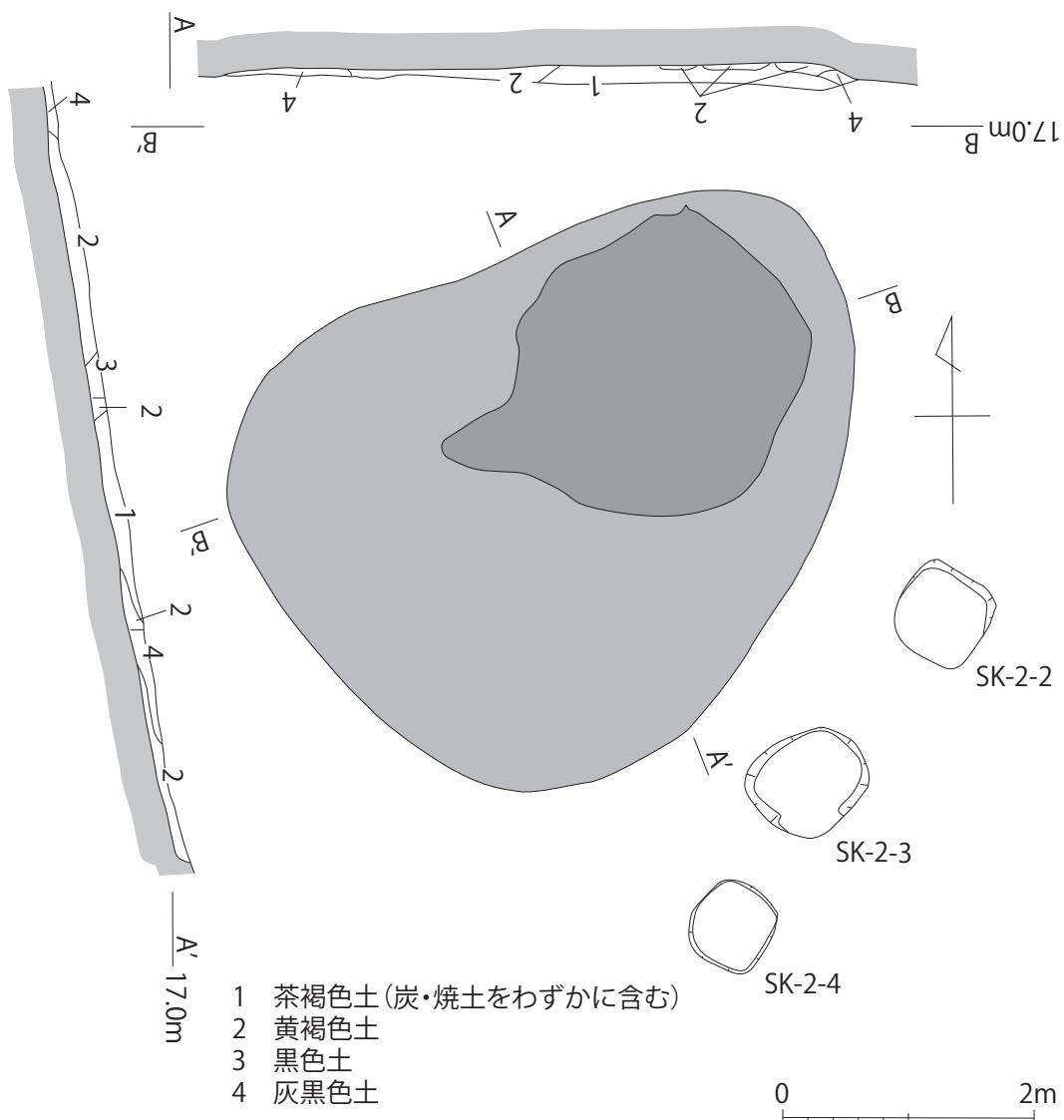
第9図 SB-2-1実測図 (S=1:60)

SK-2-1の直下、標高17m付近では、焼土・炭・黒色土の広がりであるSX-2-1が見られ、その上方で隅丸方形の浅い土坑3基(SK-2-2~4)が並んで検出された(第10図)。SK-2-2~4は、いずれも一辺70~90cm、深さ10cmほどの隅丸方形の浅い土坑で、1.5m程の間隔で一直線に並ぶ。SK-2-2には炭粒が、SK-2-4には火を受けた痕跡のある石が入り込んでいたと報告され、火を焚いた可能性が報告されている。SX-2-1の炭溜の範囲が大きく広がっていることから、この周辺では度々火を焚いている可能性があるが、SK-2-2~4に直接伴う遺物はなく、時期や機能はわからない。SX-2-1からは須恵器蓋(12-9)、瓦塔の破片(13-4)が出土している。

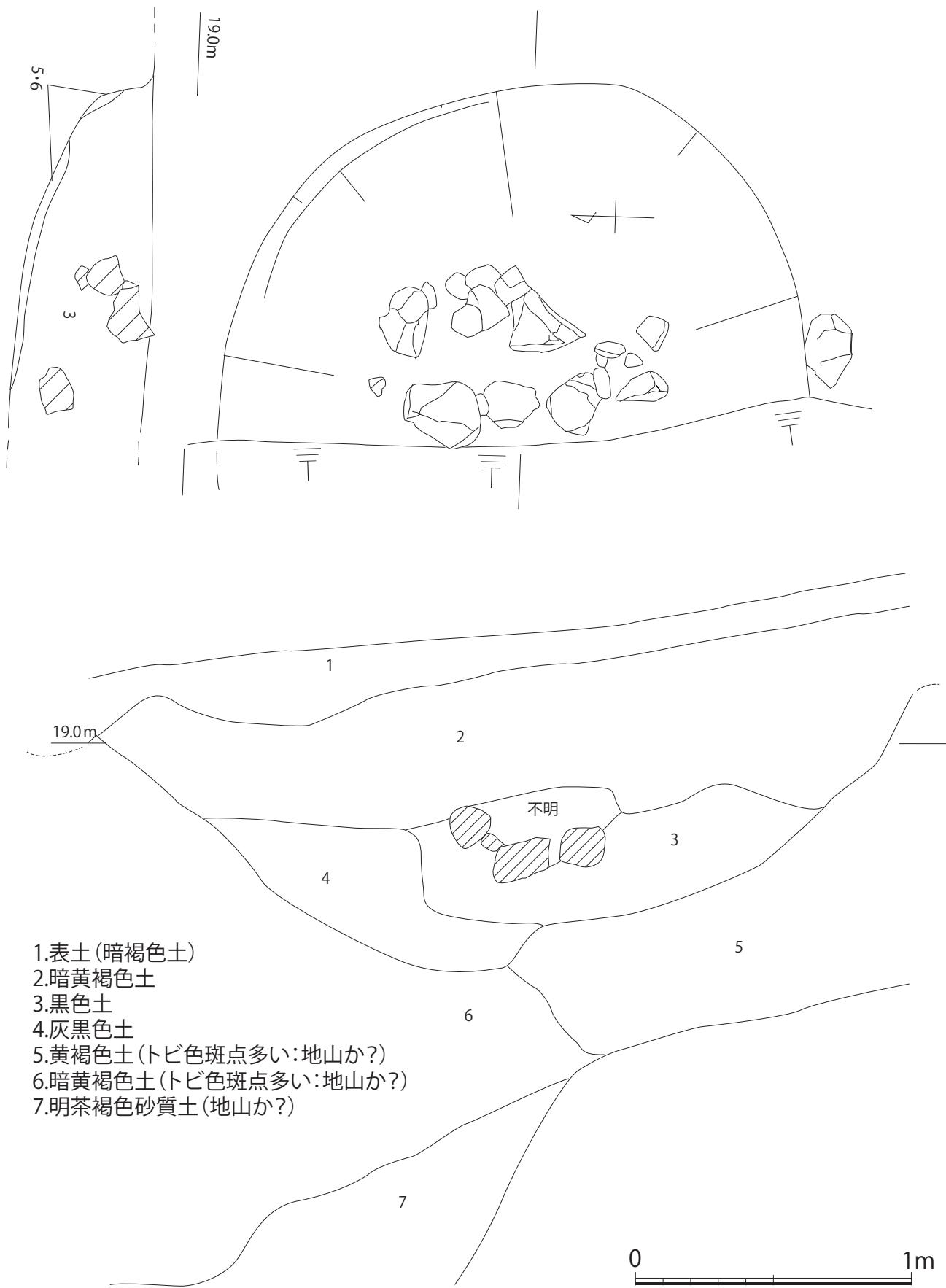
(5) 瓦塔を出土した土坑(SK-2-1)

才ノ神遺跡で出土した瓦塔とされる資料の内、一部は「瓦塔埋納土坑」と報告されるSK-2-1から出土している。トレンチによって西側が消滅し、東側の半円しか残存していないが、直径1.1m程と考えられ、深さは50~60cm。土坑の中央付近には一辺5~10cmの石が数点落ち込んでおり、その石に囲まれ、瓦塔の破片3片が埋められていたとされる。この3片は同一個体で、接合されている(13-1)。しかし、瓦塔とされる破片は、この遺構以外からも出土しており、一部の破片だけを埋納したとする説明は信じがたい。

SK-2-1は標高19m付近で検出され、前述のとおり、西半部はトレンチにより消滅している。SK-2-1に充満される黒色土中に石が見られるが、トレンチ側の土層図では石の内側の土層についての説明がなかったため、「不



第10図 SX-2-1実測図 (S=1:60)



第11図 SK-2-1実測図 (S=1:20)

明」と表示した。この部分について、報告書掲載写真以外の画像を探したところ、検出状況（写真10）では、石の内側には土が入っておらず、また、上層中央近くも石がないように見える。土坑中心に空洞があったとすれば、何らかの容器か、木材があった可能性が高い。石で囲まれた上面に向けて、木質が腐朽して穴が空いたことにより瓦塔片が落ち込んだと想像される。以上の状況から想像をたくましくすれば、SK-2-1は瓦塔を載せた木柱で、土坑内の石は掘立柱の根堅め石か。

SK-2-1は、報告ではSB-2-1が廃棄された後に掘り込まれたとされるが、連続する土層図がなく、この点を検証することはできない。写真9では、SB-2-1床面よりも下方に見え、SK-2-1床面の標高が約19.2m、SK-2-1検出面の標高が18.8m付近であることから、連続面であっても疑問はない。SK-2-1の下方に位置するSX-2-1からは、瓦塔片と須恵器蓋12-9が出土している上、II区全体の遺物の状況を考えても、SX-2-1などと同時に存在した可能性が高い。加工段であるSB-2-1前面に盛られた造成土上面の遺構だったのではないか。

（6）才ノ神遺跡II区出土遺物

12-1～8はSB-2-1から出土した須恵器。12-1～6は須恵器皿Eで、12-4と12-6は、SB-2-1の外側で重なって出土したもの。12-7は須恵器皿。底部に回転糸切り痕を残し、口縁端部を外反させる。出雲国府跡では第5形式に含まれるものか。12-8は甕。SB-2-1の床面出土とされるが、胴部の破片のみで口縁部などは確認できない。

12-9は、SX-2-1から出土した須恵器蓋。つまみを欠くが、頂部が平らで口縁端部をわずかに垂下させる。出雲国府跡では第6形式に含まれる。SX-2-1からは13-4円形瓦塔も出土している。

12-10～14は、II区包含層中から出土した遺物。12-10はSX-2-1の下方から出土した須恵器皿E。灯火痕跡は残っていない。12-11は須恵器環の小片。内面にヘラ書きにも見える線があり、その点を報告されるが、傷か。12-12は須恵器高台付き皿。口縁部がわずかに外反し出雲国府跡の第5形式に含まれると思われる。12-13は須恵器鉢A。SX-2-1下方から出土したとされ、瓦塔片（14-2・3）や須恵器蓋（12-9）、須恵器皿E（12-10）などの出土位置に近い。12-14は須恵器壺の胴部。報告で淨瓶の写しと説明されるもの。

（7）才ノ神遺跡から出土した円形瓦塔とされる遺物

報告で瓦塔とされる資料は、実測図5点が掲載される他、写真のみ掲載された資料3種5点がある。さらに、非掲載資料中から新たに3点の破片を確認した。

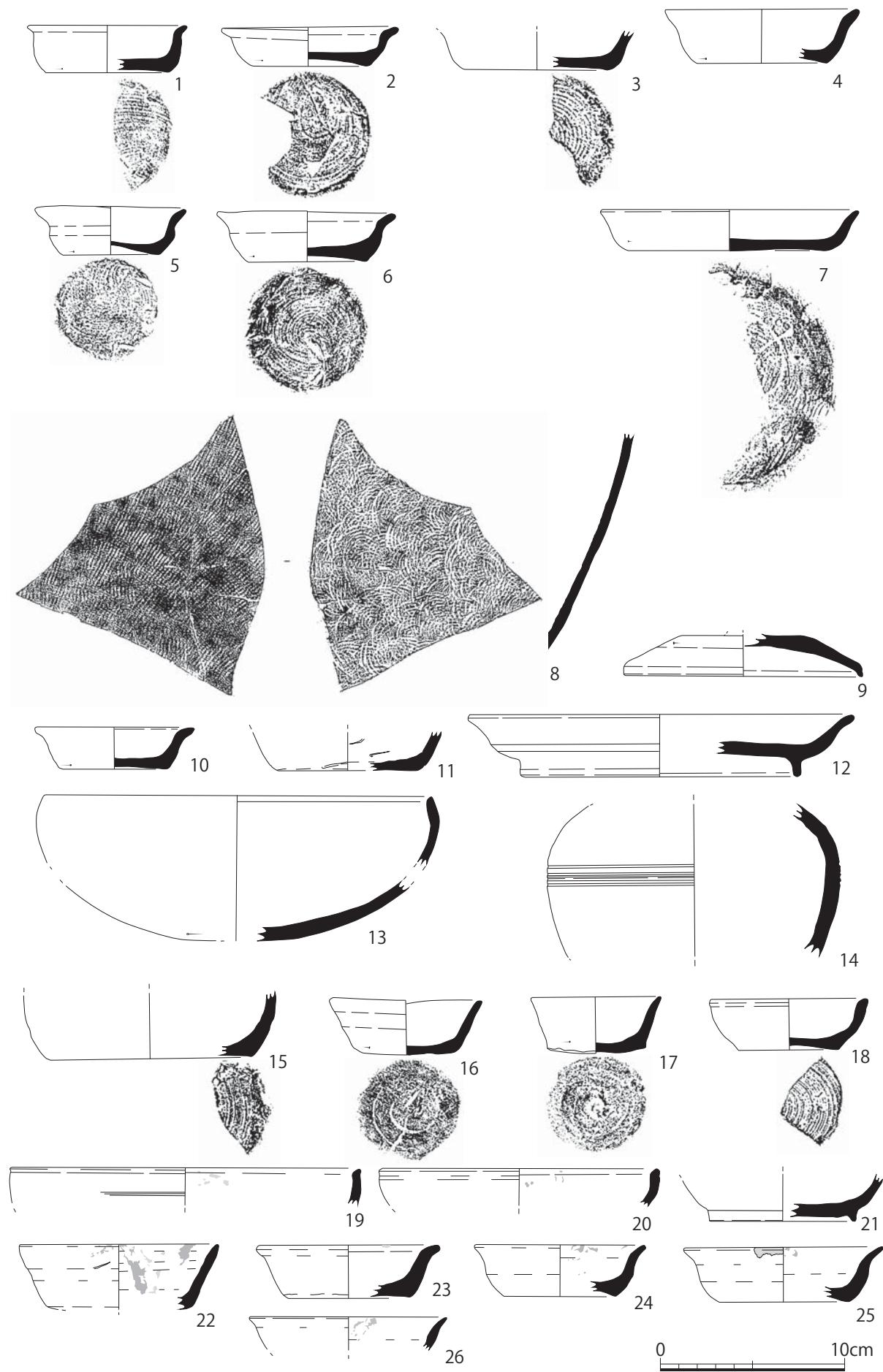
13-1は、報告書で瓦塔埋納土坑とされたSK-2-1から出土した瓦塔の破片。3片が接合した。円筒形に開く頂部は残存しており、復元口径は14.8cm。竹管文が密に打たれるが、打ち方は非常に雑で、列毎に横には並ばない。縦帶2条が残り、少なくとも2条以上の縦帶剥離痕が見えるが、やや傾いて見え、等間隔に配されていたかどうか判らない。やや軟質の焼成。13-2・3は、報告書に画像だけが示された資料で、剥離した縦帶部分。焼成や胎土は13-1とよく似ており、SK-2-1から出土した13-1から剥離した縦帶の可能性がある。竹管文は各面で別々に打たれており、面毎の位置は揃っていない。13-4は、SX-2-1で出土した屋蓋部の破片。2点が接合している。縦帶が剥落しており、竹管文列間に剥離痕が明瞭に残る。13-1～4は竹管文や焼成がよく似ており、同一個体か。

13-5も写真だけが報告されていた資料。同一個体と思われる破片2点があるが接合しない。軸部の小片で竹管文列1条が巡る。やや軟質で、器面は摩滅している。

13-6は、報告書に掲載されていなかった軸部の破片。竹管文列を1条巡らせ、その上方に8条以上のヘラ書き沈線を雑に引く。焼成は良好で、やや硬質。13-5と13-6は、焼成が異なるが、沈線や竹管文がよく似ている。

14-1・2も報告書非掲載だった資料。ツバ状の高い突帯が巡り、長方形のスカシを開ける。軸部の破片と思われるが、ツバ状の突帯は大きくは広がらず、屋蓋にはならない。透減しながらツバ状の突帯が連続するのであれば、相輪の表現か。

14-3は屋蓋部から軸部に続く部分の破片。非常に硬質に焼成され、明灰白色を呈す。軸部には長方形のスカシが残り、屋蓋部には鋭く切り込まれた沈線を2～3条ほどの単位毎に方向を変えながら刻まれる。14-4は屋蓋部先

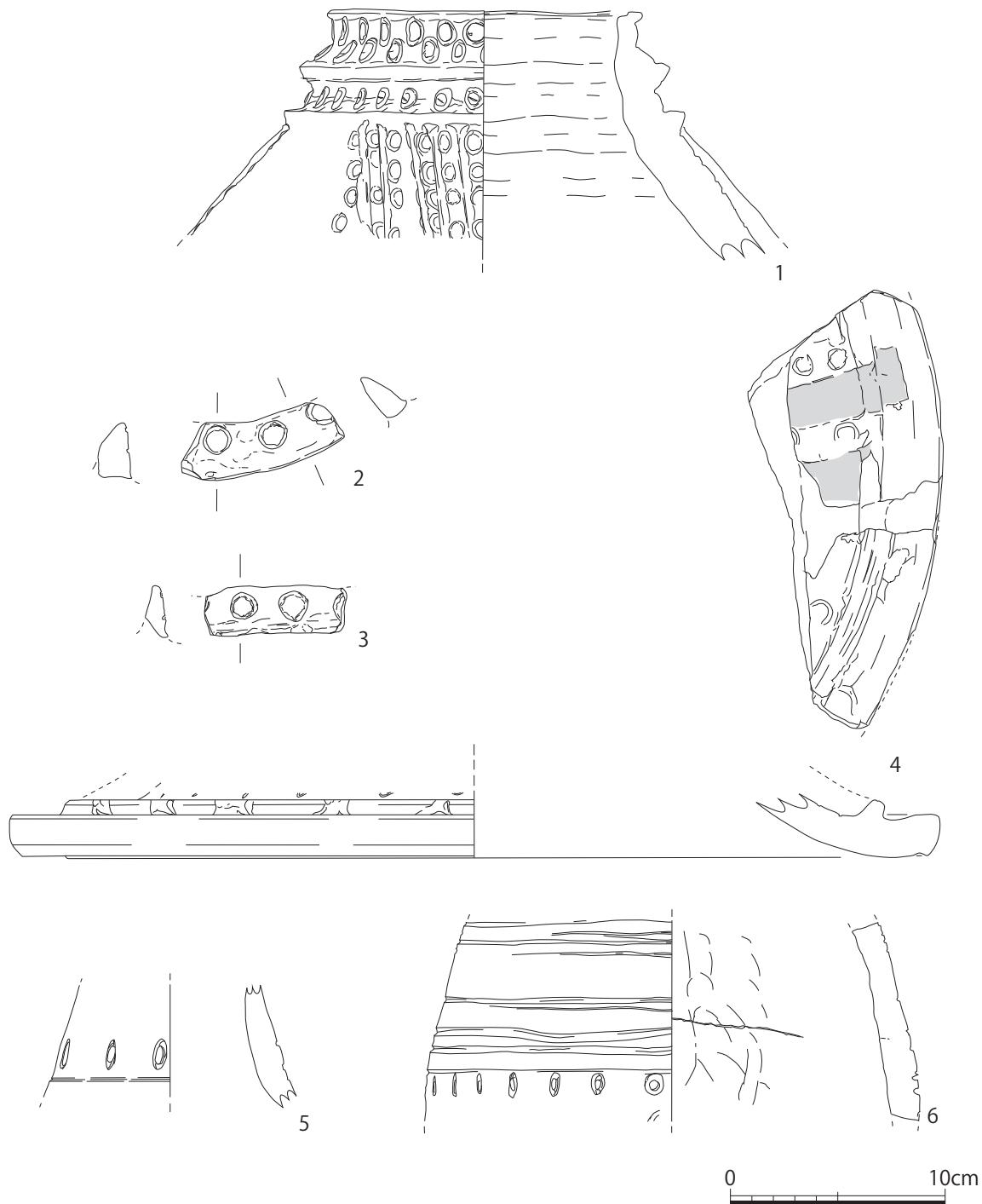


第12図 才ノ神遺跡II区出土遺物実測図 (S=1:3)

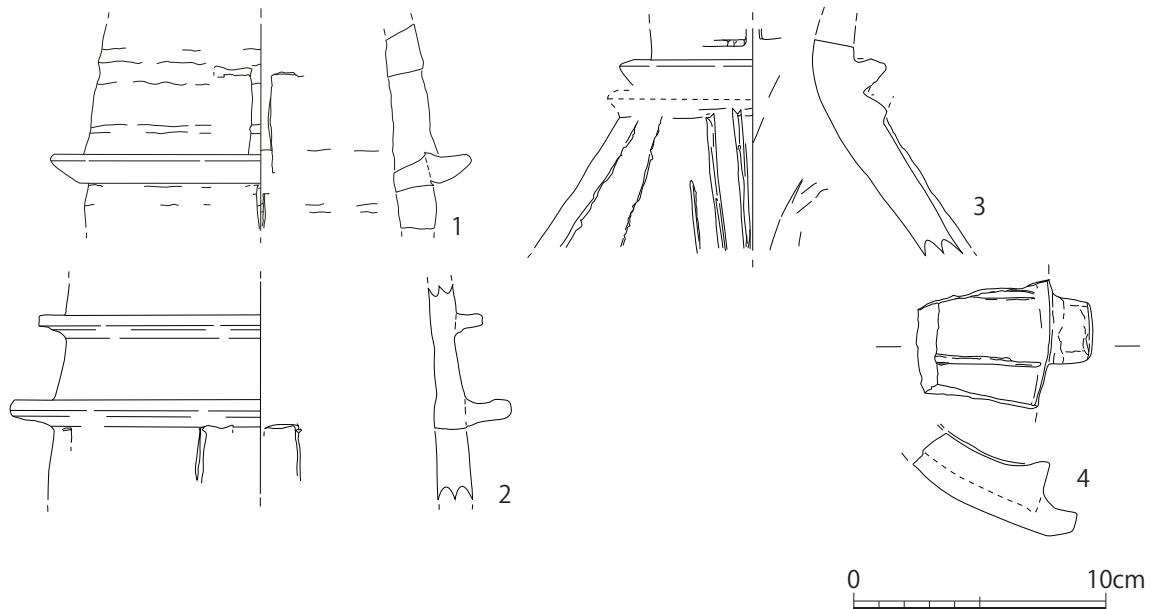
端の破片。上面側にはヘラで刻まれた沈線があり、下面側には垂木の表現を貼り付けている。沈線や焼成は14-3に似ており、同一個体か。

瓦塔とみられる資料は、いずれも砂粒の少ない胎土を使用している点が共通する。13-1~4は同一個体の可能性があるが、13-1上端部は遺存していることから、軸部とみられる13-5・6は、確実に別個体。また、屋蓋部から軸部に続くとみられる14-1~4も別個体であることから、少なくとも3点以上のパートに分かれていた可能性がある。

円形瓦塔の全形を復元するには破片が少なすぎるが、あえて想像すると、瓦塔片を出土したSK-2-1が掘立柱と考えられることから、SK-2-1に立てた木柱を軸（刹？）に、円形瓦塔を載せた形状か。複数枚の屋蓋部と軸



第13図 才ノ神遺跡II区出土瓦塔実測図 (1) (S=1:3)



第14図 才ノ神遺跡II区出土瓦塔実測図（2）(S=1:3)

部の重なりの上に相輪状の部材を載せた、円筒形の仏塔だったと想像される。

4. 瓦塔について

(1) 円形瓦塔

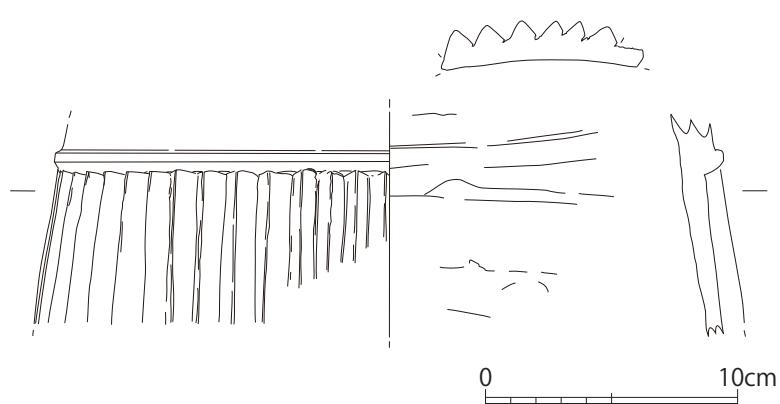
瓦塔は、塔を模した陶製の造形物である。瓦塔の出土は、全国では300カ所以上の遺跡が知られていると言うが、その多くは東日本で、西日本地域には少ない。島根県内では才ノ神遺跡の他、出雲市の山持遺跡で瓦塔の可能性がある小片（島根県教委2009）があり、鳥取県でも5例ほどが知られる。この他、県内では、大田市御堂谷遺跡で、瓦塔と報告された例（島根県教委2019）があるが、この資料については、近代以降の鬼瓦の破片であろう。

東日本で出土する瓦塔の多くは平面方形で、五重塔を模した精巧なもののが多数を占めるが、西日本では平面円形や多角形のものが目に付く。円形瓦塔の存在は、福岡県のトギハ窯跡の発掘調査（福岡大2007）などで知られるようになったが、その全体の形状をうかがえる資料は少ない。

吉備地域の瓦塔を詳細に検討した亀田修一氏の研究（亀田2009）によれば、西日本では56ヶ所の瓦塔出土遺跡が知られており、この内16遺跡が吉備地域に集中している。さらに、岡山県内の出土瓦塔の内、10遺跡で、円形もしくは多角形と推定されており、吉備地域は円形瓦塔の多い地域とされている。

(2) 山持遺跡の瓦塔

島根県内では、出雲市の山持遺跡II区から瓦塔の可能性がある資料が出土している（第15図）。山持遺跡は、吉祥天部像とする説もある人物を描いた板絵が出土するなど、古代の遺構・遺物も知られているが、山持遺跡の中でも、瓦塔片が出土したII-3区には古代の遺構はない。6層とされる出土層位には中世までの遺物を含んでいるが、古代の遺物は多くはない。一方、西側



第15図 山持遺跡2区出土瓦塔実測図 (S=1:3)

に隣接するⅢ区からは波板状凹凸面が検出されており、古代の道があったことが知られている。また、山持遺跡Ⅱ区の中世の遺物には卒塔婆状木製品があり、Ⅲ区からも大型卒塔婆状木製品が出土している。

瓦塔とされる資料は、直立に近い傾きを持ち屋蓋部から軸部に繋がる上端近くと考えられる破片で、上端近くの内径は約20cm。断面三角形を呈す縦帯を10~14mm間隔で密に配している。この縦帯は粘土帶貼り付けではなく、厚く作られた器壁を鋭利なヘラ状工具によって削り出した、特徴的な作り方となっている。スカシは見えない。胎土は精緻で砂粒をほとんど含まず、還元炎焼成されるがやや軟質。胎土・焼成は才ノ神遺跡出土瓦塔に似ており、円形瓦塔の一部だった可能性がある。

(3) 堀立柱状の構造について

才ノ神遺跡SK-2-1について、木柱を立てた掘建柱構造だったと想定した。単独で立つ堀立柱構造の造形物としては、木製灯籠が想像される。県内で古代の灯籠は、松江市の来美庵寺（山代郷北新造院跡）金堂正面の遺構が知られている。金堂跡とされる第2基壇階段跡の南方約3mの位置にある隅丸長方形の土坑で、中心に抜き取り痕とされる丸いくぼみがあり、瓦や長頸瓶の破片が落ち込んだ状態で検出されている。発掘調査では、土坑内部の掘削を行っていないが、素掘りの穴に竿を埋め込んで根巻き石によって固定していた可能性が報告される（島根県教委2002）。根巻き石の可能性のある石材や、その上に置かれるはずの受花とされる石材も示されているが、これらの石材は遺構から離れて出土している上、この石材を、須弥壇上の本尊を支える根巻き石にも推定されていることから、須弥壇や本尊に関わる石材だった可能性が高い。堀立柱であり、竿石そのものを始め、灯籠に関わる石材が出土していないことから、木製の灯籠だったか。

遠江国分寺跡の再発掘では、金堂基壇から南へ約10mの伽藍中軸線上で掘建柱の灯籠の痕跡が発見されている（磐田市教委2016）。残された木質から竿はコウヤマキ製で、掘建柱構造の竿の周囲には、版築状の土層が確認されている。版築状の土層中に瓦片を含んでいることから、金堂建立以降に設置されたとされる。石材や金属片は出土していない。

備後寺町廃寺では、令和元年度の発掘調査で、金堂正面から瓦や礫が入れ込まれた土坑が発見され、木製灯籠の痕跡だと考えられている（三次市教委2019）。このほか、大和西安寺でも木製灯籠の痕跡があると言う（上原2020）。

県外では、灯籠の周囲から灯火器がまとめて出土している例が知られている。奈良県桜井市の山田寺跡では金堂前に設置された灯籠の周囲から多量の土師器皿Cが出土（奈文研2002）しており、灯籠に使用した後に周囲に廃棄されたと考えられている。

才ノ神遺跡の場合、SK-2-1の周囲から灯火器が多量に出土すると言う事実はなく、火袋を思わせる破片もない。二次焼成の痕跡も、SX-2-1に関わるとみられることから、灯籠ではないだろう。

5. まとめにかえて



現在の才ノ神遺跡付近（越峰池付近から）

才ノ神遺跡I区では、須恵器皿Eだけでなく、須恵器壺や土師器壺にも灯火痕跡の残るものがあり、8世紀中頃から10世紀にかけて灯火を使用した施設があったと考えられる。報告で火を焚いたとされるSD-1-6の時期や性格は判らないが、他の資料はいずれも土器を使用した灯火であり、屋内での照明が想定される。SB-1-3には建て替えの痕跡があり、長期間の使用が想定されることから、この建物で灯火が使用されたか。

才ノ神遺跡I区は、8世紀中頃から始まり、9世紀前葉を中心に活動し、10世紀頃まで存続した建物SB-1-3を中心とする施設群だっ

たと想像される。この施設の機能を示す遺物はないが、広い平坦面を確保できない山中で、灯火を使用し、一般集落にない綠釉陶器を所持していたことから、山林寺院だったと想像される。

一方、才ノ神遺跡II区は、8世紀後半から9世紀前葉のごく短い期間に機能した可能性が出てきた。SK-2-1は、掘建柱構造の木柱だった可能性が高く、円形瓦塔を載せたものであろう。その背後には、須恵器皿Eを伴うSB-2-1があり、瓦塔との関連を考えれば、小規模な仏堂だったのではないか。また、才ノ神遺跡II区の包含層からは、僧侶の持物と言われる須恵器鉢Aが出土している。こうした状況から、小規模な仏堂SB-2-1の前面に、仏塔としての円形瓦塔が建てられ、仏堂で献灯が行われていた様子が想像される。

瓦塔の機能については、仏堂（SB-2-1）の本尊に導くための灯籠のような機能や、墓標・供養塔なども想像されるが、周囲の状況から、墓地だった痕跡は見いだせず、直接灯火を置く灯籠だった可能性も少ないとから、木造塔に代わる塔婆だったか。

『続日本紀』天平十六年十二月十四日条には、百姓の造塔を許すが、伽藍の内に建て、山野の路辺に建ててはならないとする勅が出されていることから、天平年間には、古代寺院以外の場所にも塔が建てられるケースがあったと考えられる。こうした場合の塔は、石塔や瓦塔など、木造塔以外の小型塔が多く含まれていたと想像される⁽³⁾。

才ノ神遺跡の古代の遺構は、いずれも山林寺院の施設だったと考えられ、並存した間は一体の施設であろう。遺跡最高所に位置し、後には綠釉陶器を持つSB-1-3を中心に、周辺の山中には、SB-2-1のような小規模な仏堂が点在していたと想像される。円形瓦塔を建て、明かりを灯した仏堂では、いったいどのようなことが行われていたのだろうか。北に開ける遺跡の立地から、「北辰灯」など、北極星・北斗七星に関わる祭祀⁽⁴⁾や、天平七年、九年の疱瘡の流行を受けて行われた悔過会⁽⁵⁾などが想像されるが、現状ではそれを検討する材料はない。

清水寺などの現代にも続く寺院と異なり、才ノ神遺跡は古代の早い段階でその機能を終えている。『出雲国風土記』記載の新造院と同様に、中世に存続しない古代の山林寺院の実態は不明な点が多く、その盛衰を解明するには今後の資料の増加に期待したい。

この報告を作成するにあたり、現地調査・報告書作成を担当された大庭俊次氏には、当時の事実関係の確認など、様々にご協力いただきました。記して感謝の意を表します。

註

(1) 調査時の状況等は下記報告書による。

島根県教育委員会『才ノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷I遺跡』1995年

(2) 須恵器皿E・鉢Aの名称は、平城宮・京での分類にしたがった。近年の調査成果を踏まえた分類が以下の報告書に示されている。

奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告書XVI』2005。

(3) 山野路辺における造塔の禁止は、宗教的な役割を果たした小塔の増加を示すと共に、百姓層の山野占取の実態に歯止めをかける目的で施行されたと考えられている。

宮瀧交二「山野路辺における「百姓」の「造塔」について」『古代史研究 13』立教大学古代史研究会1995年

(4) 延暦十八年九月に百姓の北辰灯を禁止した記録があり、北辰灯が広く民間で行われていた可能性がある。そのほか、『日本靈異記』下巻第5縁の例から、特定の寺院などに赴いて献灯することが知られている。

桑田訓也「文献から見た灯明皿」『灯明皿と官衙・集落・寺院』第二十三回古代官衙・集落研究会報告書、独立行政法人奈良文化財研究所2020年

(5) 『続日本紀』天平七年、天平九年の疱瘡の流行後、天平十六年条には天下の諸国に薬師悔過行させた記録が見える。続日本紀では、この薬師悔過の記載に統いて、金鐘寺と朱雀路に灯一万枚を燃したとあり、悔過会と灯火が関連する可能性があるか。

【引用・参考文献】

- 石井清司「篠窯跡群出土の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第7号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
1983年
- 磐田市教育委員会『特別史跡 遠江国分寺跡』2016年
- 上原真人「燈樓始原－石が先か、木が先か－」『辻尾榮市氏古希記念 歴史・民族・考古学論攷（I）』大阪・郵政考古学会
2019年
- 上原真人「寺院資材帳の考古学」『季刊考古学』152号 雄山閣 2020年
- 大谷晃二・清野孝之「毘売塚古墳の再検討」『島根考古学会誌』第13集、1996年
- 加藤義成『出雲国風土記』1997年
- 亀田修一「吉備の瓦塔」『環瀬戸内海の考古学』下巻 古代吉備研究会 2002年
- 桑田訓也「文献から見た灯明皿」『灯明皿と官衙・集落・寺院』第二十三回古代官衙・集落研究会報告書、独立行政法人奈良
文化財研究所 2020年
- 島根県教育委員会『出雲国府跡 9－総括編－』2013年
- 島根県教育委員会『臼コクリ遺跡・大原遺跡』1994年
- 島根県教育委員会『門生黒谷 I 遺跡・門生黒谷 II 遺跡・門生黒谷 III 遺跡（五反田古墳群）』1998年
- 島根県教育委員会『来美廃寺』2002年
- 島根県教育委員会『才ノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷 I 遺跡』1995年
- 島根県教育委員会『島田南遺跡』1992年
- 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』1984年
- 島根県教育委員会『徳見津遺跡・目廻遺跡・陽徳寺遺跡』1996年
- 島根県教育委員会『御堂谷遺跡・諸友大師山横穴IV群1号穴』2019年
- 島根県教育委員会『山持遺跡Vol.2』2009年
- 島根県教育委員会『陽徳遺跡・平ヲ I 遺跡』1995年
- 島根県古代文化センター『解説出雲国風土記』2014年
- 重要文化財清水寺本堂保存修理委員会『重要文化財清水寺本堂保存修理工事報告書』1992年
- 神野恵「古代都城の灯火器－灯火痕観察のススメ－」『灯明皿と官衙・集落・寺院』第二十三回古代官衙・集落研究会報告書、
独立行政法人奈良文化財研究所 2020年
- 奈良文化財研究所『山田寺発掘調査報告書』2002年
- 奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告書X VI』2005年
- 林健亮「清水寺本堂下層から出土した土器について」『古代文化研究』第29号、島根県古代文化センター 2021年
- 林健亮「古代の山林寺院とその参道」『山陰における古代交通の研究』島根県古代文化センター 2022年
- 福岡大学人文学部考古学研究室『豊前・トギハ窯跡の調査』2007年
- 三次市教育委員会『史跡寺町廃寺跡第7次発掘調査現地説明会資料』2019年
- 第1図は国土地理院発行 1:50000 地形図『松江』『米子』を使用した。

遺物観察表

挿図番号	報告書番号	再実測	遺構名	種別	器種	法量			色調	胎土	焼成	特徴	備考
						口径	器高	底径					
7-1	7-9		SB-1-2a	土師器	壺								SB-1-3に関わるか
7-2	7-10	○	I-2 SB-1-2a	土師器	壺	(113)	48	(64)	橙褐色	白色の砂粒をわずかに含む	良好	スス・タール状の付着物	SB-1-3に関わるか
7-3	7-11		SB-1-2a	土師器	壺								SB-1-3に関わるか
7-4	7-12		SB-1-2b	土師器	壺								SB-1-3に関わるか
7-5	7-13		SB-1-2b	土師器	壺								SB-1-3に関わるか
7-6	7-14	○	I-2畔肩	土師器	壺			(81)	明橙色	白・赤色の砂粒を含む	良好	内面にタール状の黒褐色付着物	切り離し不明
7-7	7-15		SB-1-2b	土師器	高台付き壺								SB-1-3に関わるか
7-8	10-16		ピット列	土師器				(50)					
7-9	10-17		SD-1-6	土師器	壺								
7-10	10-18		SD-1-6	土師器									
7-11	10-19		SD-1-6	須恵器	皿E	95	25	54					SB-1-3に伴うか
7-12	10-20		SD-1-6	綠釉陶器	皿	(13)	24	(65)				篠窯跡群皿D	10C中葉 SB-1-3に伴うか
7-13	11-27		I区西斜面	土師器	壺								
7-14	11-28		I区西斜面	土師器	壺								
7-15	11-29		I区西斜面	土師器	壺								
7-16	11-33		I区南斜面	土師器	甕	(17)	135					体部外面にスス付着	
7-17	11-34		I区南斜面	記載無し									
7-18	11-35		I区南斜面	須恵器	長頸瓶								
7-19	1	○	I	須恵器	壺							胴部中央に突帯 小片	SB-1-3に関わるか
12-1	14-1		SB-2-1	須恵器	皿E								
12-2	14-2		SB-2-1	須恵器	皿E								
12-3	14-3		SB-2-1	須恵器	皿E								
12-4	14-4		SB-2-1	須恵器	皿E								
12-5	14-5		SB-2-1	須恵器	皿E								14-6と重なって出土
12-6	14-6		SB-2-1	須恵器	皿E								14-5と重なって出土
12-7	14-7		SB-2-1	須恵器	皿								
12-8	14-8		SB-2-1	須恵器	甕								
12-9	18-11		SX-2-1	須恵器	蓋								
12-10	20-13		SX-2-1下方	須恵器	皿E							灰色～濃灰色	
12-11	20-14	○	II-1	須恵器	壺			(78)	暗赤褐色	白色の小砂粒を含む	酸化炎焼成、硬質	回転糸切り	内面側にヘラによる線が見える
12-12	20-16		SX-2-1下方	須恵器	高台付き皿								
12-13	20-17		SX-2-1下方	須恵器	鉢A	(210)			緑灰色		堅固	いわゆる鉄鉢形	
12-14	21-18			須恵器	壺				灰色		堅固	自然釉がかかる	淨瓶の写しき(報告書)
12-15	21-20		SB-2-2下手の覆土	須恵器	壺								
12-16	21-22		SK-2-2～4周辺	須恵器	壺								
12-17	21-23		SK-2-2～4周辺	須恵器	壺								
12-18	21-24		SK-2-2～4周辺	須恵器	壺								
12-19	12	○	II-2-2表土下	須恵器	壺	(149)			赤褐色	白色の小砂粒を含む	やや軟質	口縁部外面にくぼみ	内面側にタール状の褐色付着物
12-20	11	○	II-2-1表土中	須恵器	壺	(190)			明灰褐色	白色の小砂粒を含む	良好	口縁部外面にくぼみ	口縁部内面に薄いタール状の暗褐色付着物
12-21	10	○	II-1重機排土中	須恵器	高台付き壺			(79)	青灰色	白色の小砂粒を含む	良好	回転糸切り	
12-22	6	○	II	須恵器	壺	(107)			青灰色	白色の砂粒を含む	良好	内面にスス・タール状の付着物	口縁部外面にタール状の付着物
12-23	5	○	II-2-2表土下	須恵器	皿E	(107)			暗赤褐色	白色の小砂粒をわずかに含む	良好		小片
12-24	4	○	II-1黒色土グリッド分	須恵器	皿E	(109)	30	(70)	暗褐色	白色の小砂粒を少量含む	良好	口縁部内面にタール状の黒色付着物。外面上にもスス状の変色	
12-25	3	○	II重機排土中	須恵器	皿E	(90)	28	(61)	灰褐色	白色的やや大きな砂粒を含む	良好	内面の口縁部近くを中心とするタール状の暗褐色付着物	
12-26	2	○	II-2	須恵器	皿E	(96)	28	(66)	灰褐色	白色の小砂粒を含む	良好	口縁部上面にわずかにスス状の付着物あり	

瓦塔観察表

			遺構名	器種	部位	口径	外形	色調	胎土	焼成	特徴	備考
13-1	16-10	○	SK-2-1	瓦塔	軸・屋蓋部	(148)		明黄白色 灰色の砂粒をわずかに含む	やや軟質	貼り付けの縦帯、一部剥離。密に配された竹管文の配置は雑		
13-2	18-12a	○	II-2	瓦塔	縦帯			明黄白色 灰色の砂粒をわずかに含む	軟質	不等間隔の竹管文。左右で位置がずれる		
13-3	18-12b	○	II-2	瓦塔	縦帯			明黄白色 砂粒を含まない	やや軟質	屋蓋部側の竹管の痕跡を残す		
13-4	18-12d	○	SX-2-1	瓦塔	屋蓋部		(435)	明黄白色 灰色の砂粒をわずかに含む	軟質	剥落した縦帯間に雑に竹管文を打つ。縦帯は剥落		
13-5	18-12e	○	SX-2-1	瓦塔	軸部			明灰白色 砂粒を含まない	軟質	竹管文		2片あり
13-6	15	○	II区大きい 礫の層	瓦塔	軸部			灰色 砂粒を含まない	良好硬質	雑なヘラ書き沈線8条以上、竹管文1周		13-5に似るか?
14-1	13	○	II-2	瓦塔	軸部			明灰色 砂粒を含まない	良好	ツバ状の高い突帯の上下に長方形スカシ		
14-2	14	○	II-2	瓦塔	軸部			明灰色 砂粒を含まない	良好	高い突帯2条以上、長方形スカシ5方向程度		
14-3	21-25a	○	II区排土中	瓦塔	軸・屋蓋部			明灰白色 砂粒を含まない	良好	切り出しによる縦線、2~3条毎に方向を変える	軸部に長方形スカシ	内面から断面が黒褐色に変色。2次焼成?
14-4	21-25b	○	II-2-3	瓦塔	屋蓋部軒先		(520)	明灰白色 砂粒を含まない	良好	切り出しによる溝、鉛直方	垂木表現は貼り付け	暗灰色のスヌ付着物あり



写真1 才ノ神遺跡 I 区SB-1-2a（北から）



写真2 才ノ神遺跡 I 区SB-1-2b（北東から）



写真3 才ノ神遺跡 I 区SD-1-6土層堆積状況（南から）



写真4 才ノ神遺跡 I 区SB-1-3完掘状況（東から）



写真5 才ノ神遺跡 I 区近景（東から） 画面左端がSB-1-2a、左奥にSB-1-3、遠景は中海から島根半島



写真6 SK-2-2~4検出状況（北西から）



写真7 SK-2-2~4完掘状況（南東から）



写真8 SX-2-1付近瓦塔出土状況（北西から）



写真9 SK-2-1（東・SB-2-1から：右手の土器は12-8）



写真10 SK-2-1検出状況（断面・西から） 空洞があいているのが判る



写真11 SK-2-1掘り込み面検出状況（断面・西から）

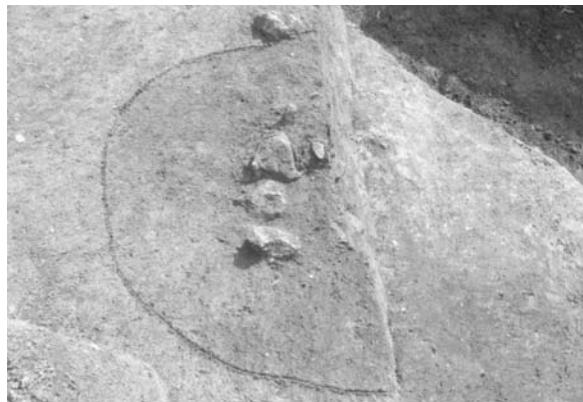


写真12 SK-2-1掘り込み面検出状況（上面・北から）



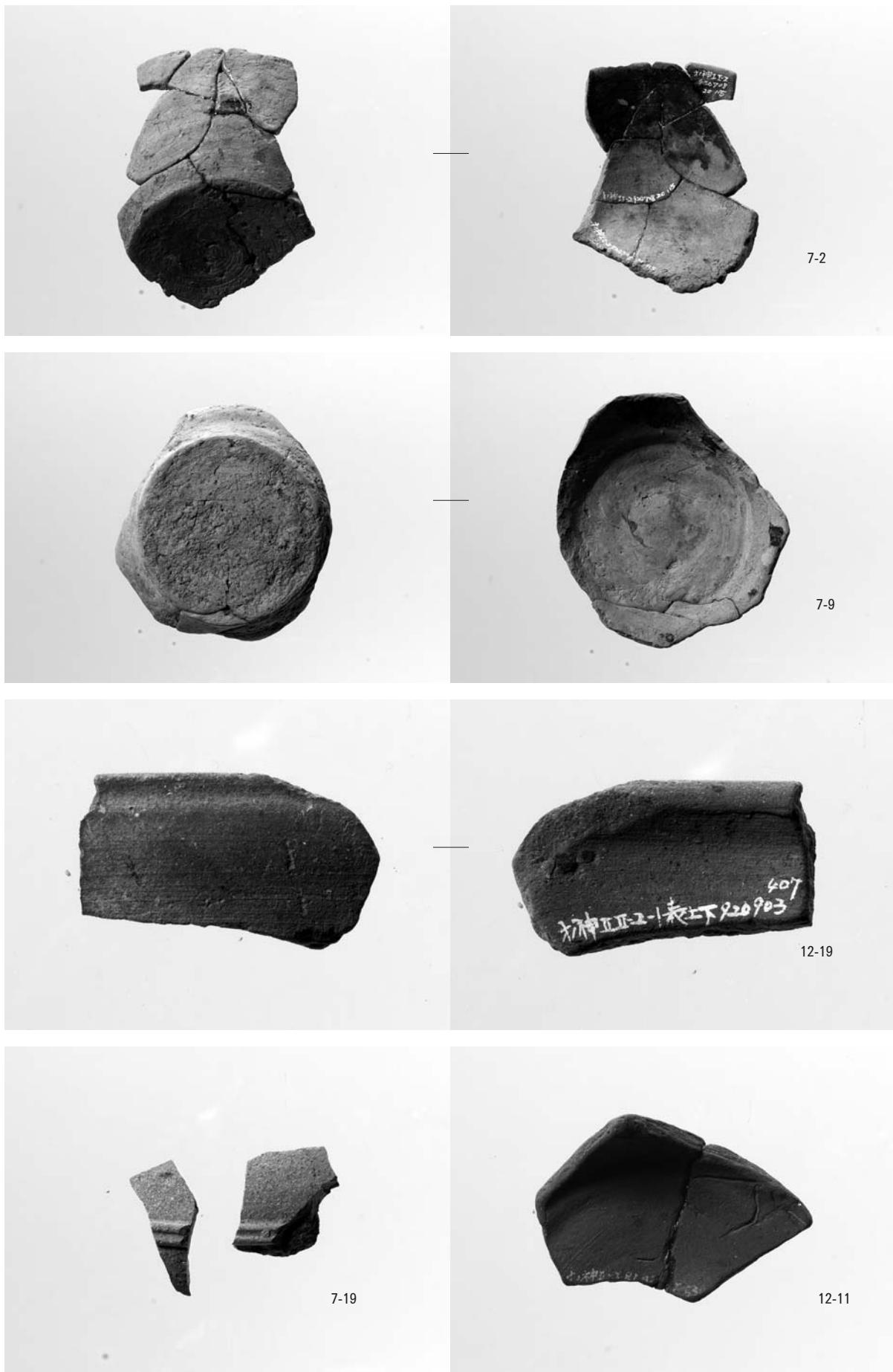
写真13 SK-2-1土層堆積状況（北から）

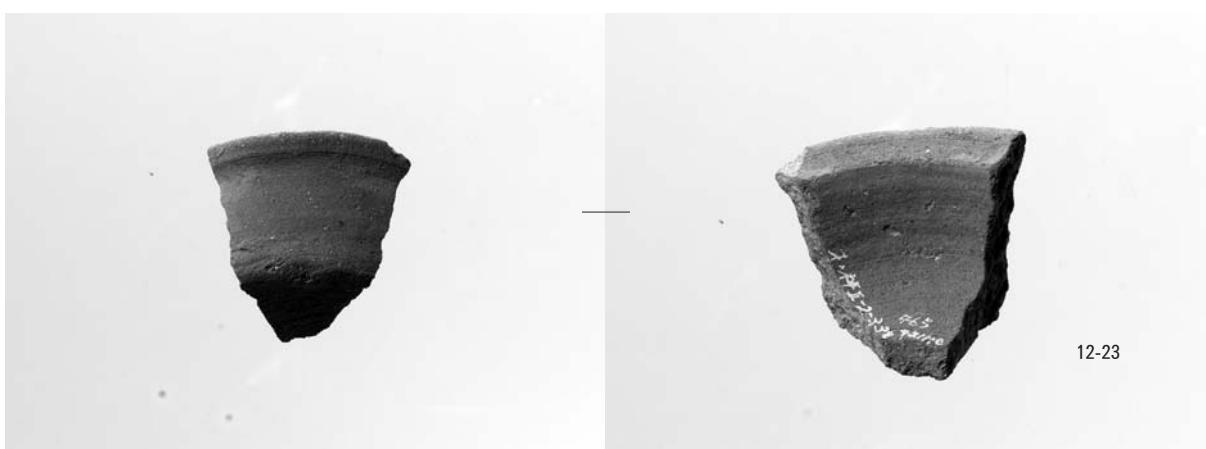
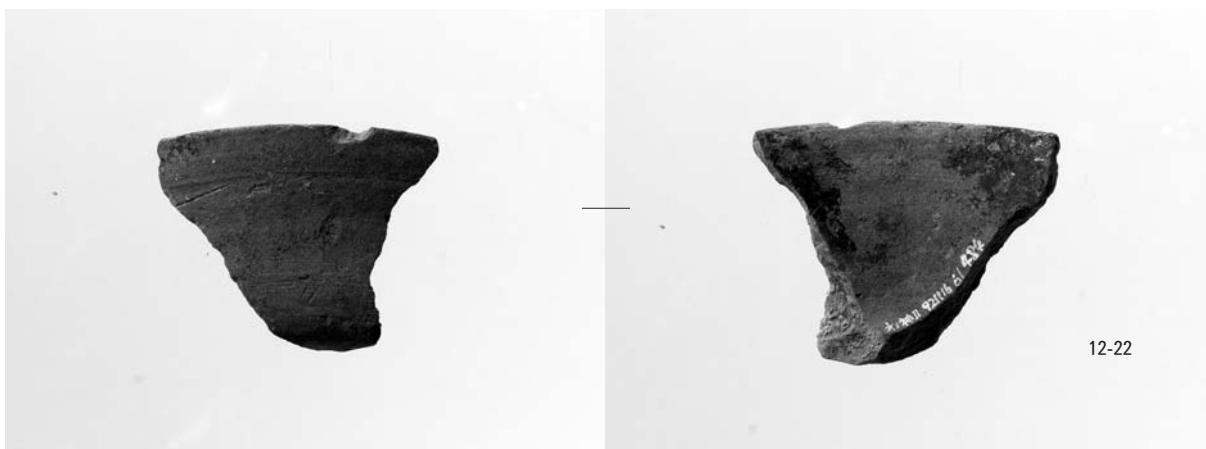


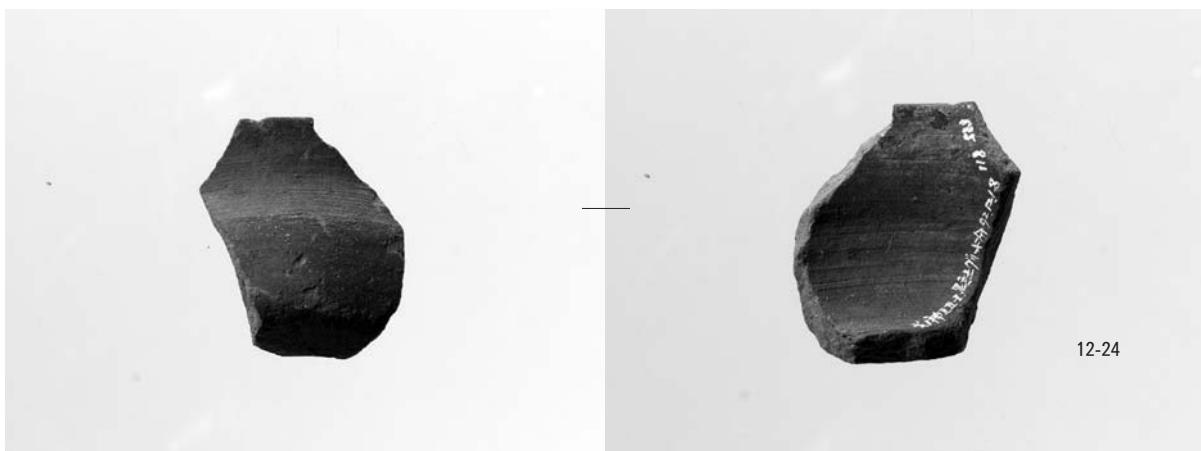
写真14 SK-2-1掘削状況（断面・西から）



写真15 才ノ神遺跡II区調査後全景（西から）中央やや右寄りの加工段がSB-2-1。その手前にSK-2-1がある。



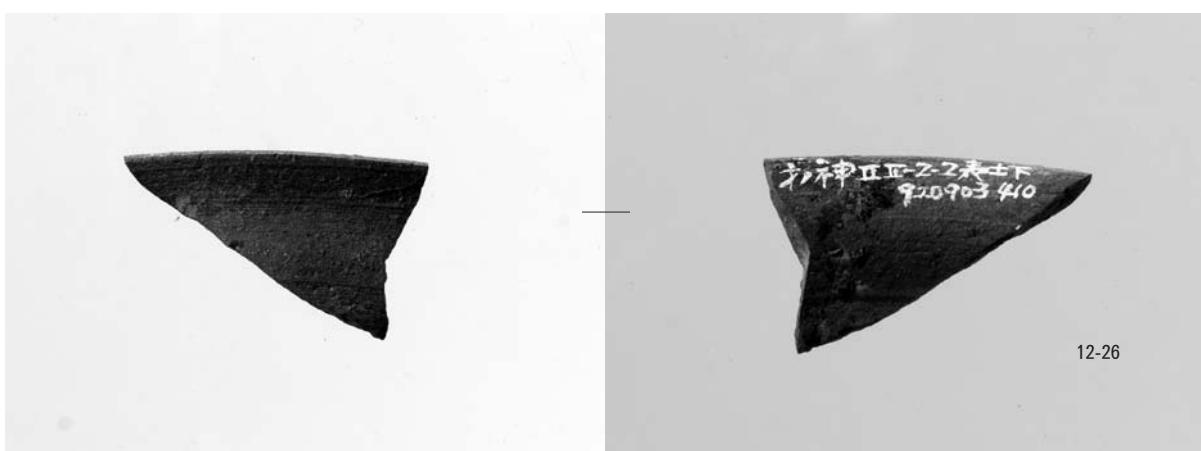




12-24



12-25



12-26



13-1

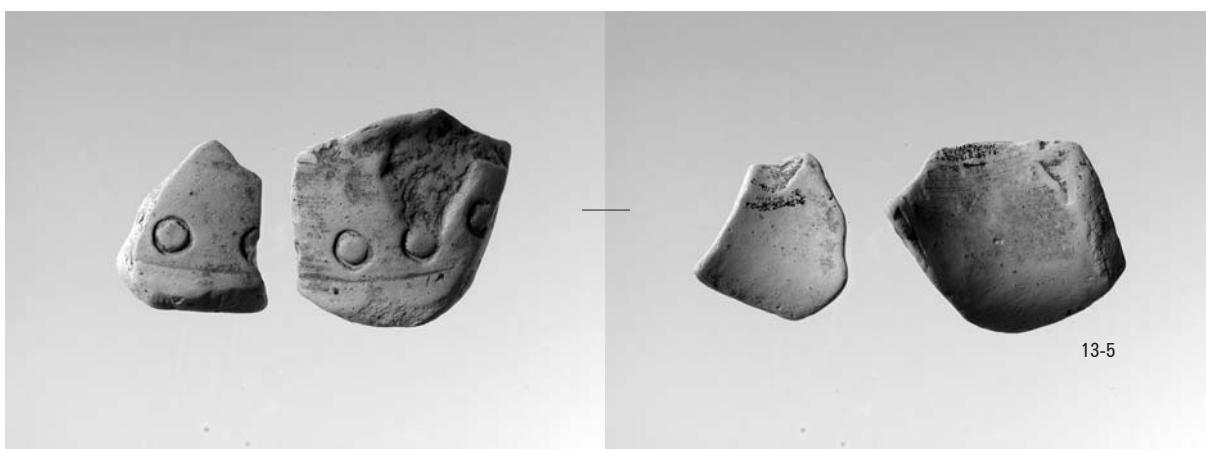


13-2

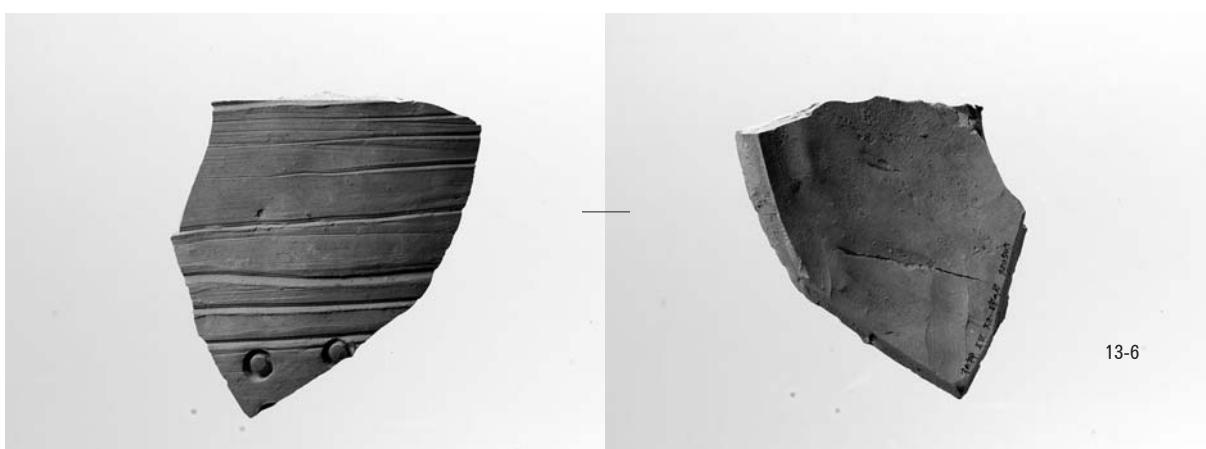
13-3



13-4



13-5



13-6

